

ダバ語における「視点」を示す二系列の助動詞

白井 聡子

- 1 序
 - 1.1 研究の背景
 - 1.2 言語の概況
- 2 問題点
 - 2.1 助動詞の分類
 - 2.2 先行研究
 - 2.3 主語の人称との相関について
 - 2.3.1 人称の分裂—発話源／非発話源の区別—
 - 2.3.2 人称の一致を示さない例
 - 2.4 証拠性との相関について
- 3 未完了の助動詞：記述と分析
 - 3.1 未来における意図的な行為
 - 3.1.1 非発話源主語とA系列助動詞の共起
 - 3.1.2 疑問文
 - 3.1.3 伝達文
 - 3.1.4 まとめ
 - 3.2 継続中の意図的な行為
 - 3.2.1 発話源による行為
 - 3.2.2 発話源の関与
 - 3.2.3 主観的推測
 - 3.2.4 まとめ
 - 3.3 過去の継続的な行為
 - 3.4 非意図的な事態を述べる場合
 - 3.4.1 継続中の非意図的動態を表す場合
 - 3.4.2 心理的状态を表す場合
 - 3.5 考察
 - 3.5.1 発話源の視点の有無
 - 3.5.2 まとめ：未完了助動詞の使い分けと視点
- 4 助動詞体系
 - 4.1 完了の助動詞 wu/wua
 - 4.1.1 発話源の参与する行為の文
 - 4.1.2 発話源の参与しない文
 - 4.1.3 2人称主語とA系列助動詞の共起
 - 4.1.4 疑問文
 - 4.1.5 伝達文
 - 4.1.6 非意図的な事態を述べる場合
 - 4.1.7 まとめ
 - 4.2 経験の助動詞 na/na
 - 4.2.1 意図的行為を述べる陳述文
 - 4.2.2 疑問文と伝達文
 - 4.2.3 非意図的な内容を述べる場合
 - 4.3 過去の助動詞 hje/hcie/hcia
 - 4.3.1 発話源による意図的行為
 - 4.3.2 非発話源のみが参与する文
 - 4.3.3 発話源の参与
 - 4.3.3 非意図的内容を述べる場合
 - 4.3.5 考察：A系列の分岐
 - 4.4 反復の助動詞 ndu/ndue
 - 4.4.1 「無意志動詞」に付加される場合
 - 4.4.2 「意志動詞」に付加される場合
 - 4.4.3 疑問文
 - 4.4.4 考察：離接標識の付加される位置
 - 4.5 まとめ
- 5 結

1 序

1.1 研究の背景

中国西南部は、多数の少数民族が居住し、互いに通じない数多くの言語が話される、言語蝟集地帯である。国家制度上の民族分類とその言語使用は一致しておらず、特に、一つの「民族」が地域ごとに異なる言語を保持する状況が多く見られる。四川省西部には“藏族”（チベット族）の居住地域が広がっているが、この地域のチベット族が用いる言語としては、チベット語の方言以外に、現在判明しているだけでも10種類以上の言語がある。本稿で考察の対象とするダパ語¹⁾は、それらの言語の一つである。

この四川省西部を中心とし、北は甘肅省の一部、南は雲南省北部およびチベット自治区南東端に至る回廊状の一带は、費 (1980: 158) によって“歴史與語言科学的一个宝贵的園地”（歴史と言語科学の貴重なフィールド）として紹介されて以来、特に注目を集めてきた。以下では孫 (1983b) に倣い、同地域を「川西民族走廊」（四川省西部の民族回廊）と呼ぶことにする。

川西民族走廊は、漢語、チベット語、彝語という大言語の境界地帯に当たり、話者数が数千から数万程度の小言語が多数話されている（図1参照）。これらの言語は、いずれもシナ＝チベット語族チベット＝ビルマ語派に属すると考えられるが、同語派内の位置付けおよび相互の系統関係については未だに解明されていない。その一方で、川西民族走廊で話される小言語の多くが、いくつかの類型的特徴を共有している。音節初頭における豊富な子音連続、動詞に接辞を付加することで標示される方向および人称の範疇などである（西田 1993 参照）。

ダパ語ダト方言を扱った先行研究では、この言語にも人称範疇が存在するとされていた。しかし、筆者がダパ語メト方言を調査した結果、当該の現象が人称ではなく視点を表示するものであることが明らかになった。本稿の目的は、この問題を中心に、ダパ語メト方言の助動詞体系を解明することにある。

1) 先行研究では、扎壩語、Zhaba, チャバ語などの名称で言及されている。チベット語による地名が [ʈɕapa] であり、一部のダパ人もこの形式を地名として用いている。本稿で用いる言語名「ダパ語 (nDrapa)」はこの名称に由来する。

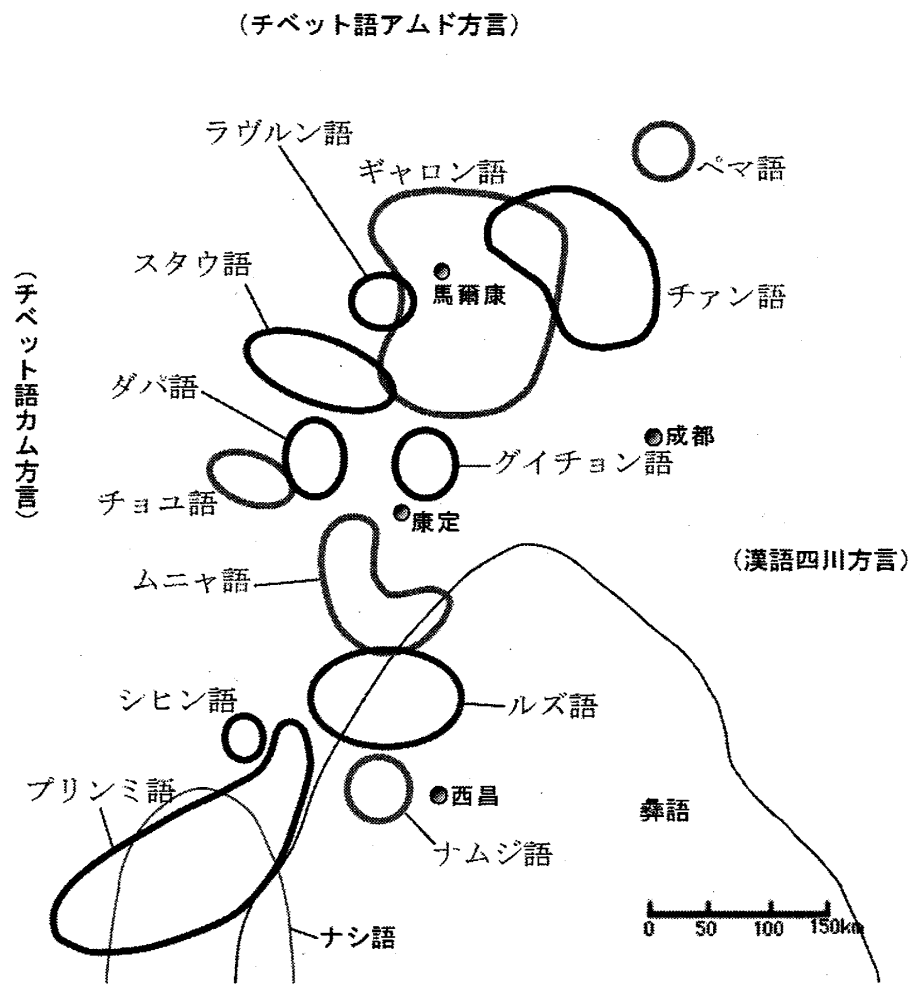


図1 川西民族走廊の言語分布

1.2 言語の概況

ダバ語は川西民族走廊で話される言語の一つで、中国四川省甘孜藏族自治州の道孚県と雅江県の県境地帯、鮮水河流域で話されている（図2参照）。系統上はシナ＝チベット語族チベット＝ビルマ語派に属している。詳細な位置付けについては議論の余地があるが、現在のところ、周辺の言語と共にチャン語支ないしチャン語群を形成するとの見方が一般的である。ダバ語の方言は、道孚県側で話される上流域方言群と、雅江県側で話される下流域方言群の二つに大きく分けられる。本稿で考察の対象とするメト方言は、道孚県仲尼郷麻中村（メト村）で話される方言で²⁾、上流域方言群に属

2) 方言は村ごとに少しずつ異なっていることから、本稿では村名の自称「メト」(meɬo)を方言名として用いる。

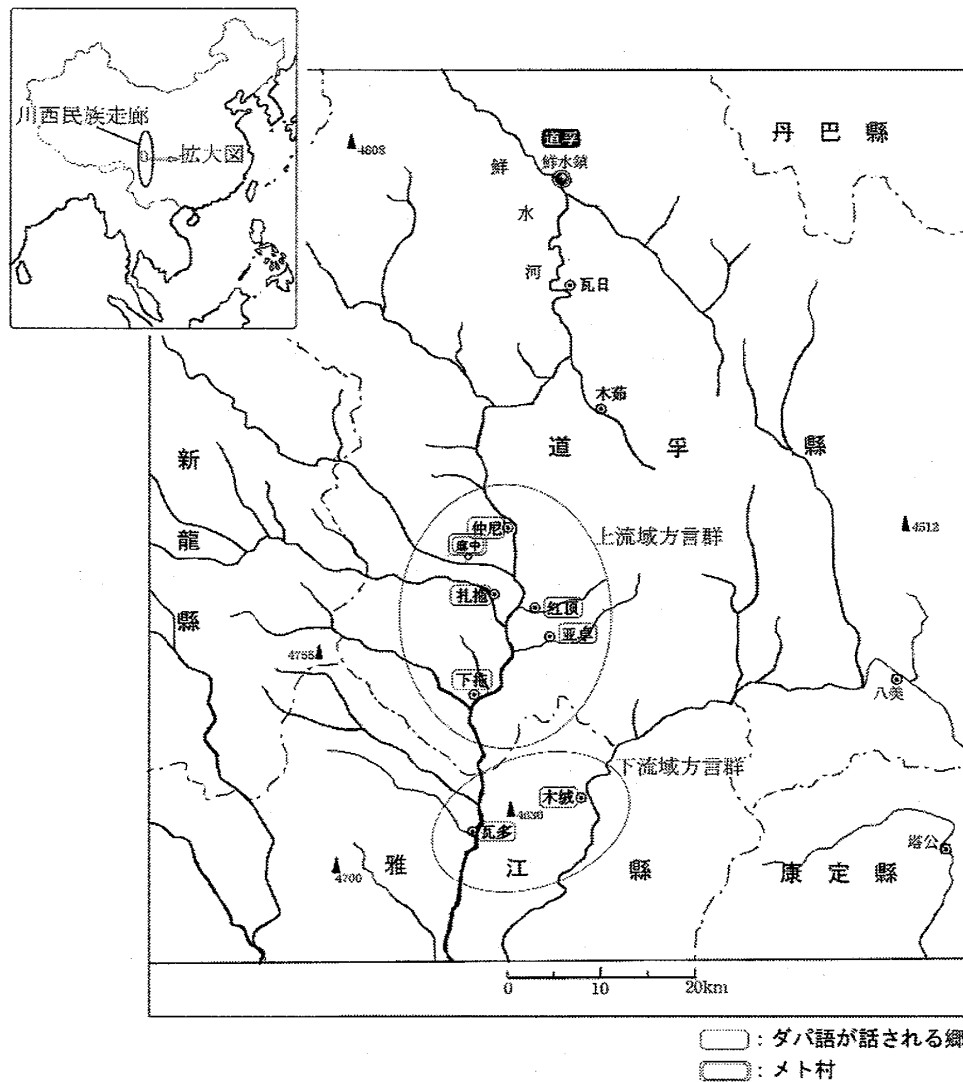


図2 ダバ語の話される地域 (白井 2006b: 120)

している。正確な話者数は未詳だが、調査協力者によれば、麻中村の人口は、2006年夏現在約280人(33戸)で、ほぼ全員がダバ語話者である。他方言も含めたダバ語話者の数については、劉・馮・奔嘉・劉等(2005: 224)によれば、上流域方言群の話者数が約5200人、下流域方言群の話者数が約2600人であるという。

ダバ語を記述した先行研究としては、筆者のものを除くと、簡潔な文法概説(黄1990b, 1991), 対照語彙集の項目(黄主編1992), 音声記述(鈴木2006), 地誌等における部分的な紹介(四川省道孚縣誌編纂委員会編1997: 541-542, 劉・馮・奔嘉・劉等2005: 224-227, 244-283)がある。

本稿で挙げるダバ語メト方言の例は、すべて筆者の現地調査によって得られたもの

である。現地調査は2002年から2006年にかけて、道孚県鮮水鎮および扎壩区で計6回実施した。主たる協力者は1945年麻中村出身の女性である。協力者はダバ語のほかに漢語四川方言を話し、若干のチベット語カム方言を理解する。調査媒介言語は漢語である。

ダバ語メト方言の音素は次の通りである。子音³⁾ /p, t, t̥, c, k; b, d, d̥, ʃ, g; ts, tɕ; dz̄, dz; m, n, ŋ, ŋj; f, s, ɕ, x; v, z, z̄, ʃ; w, j; l, r; ɭ, r̥/, 前接子音⁴⁾ /N, H, ʔ/, 母音⁵⁾ /i, ī, u, u; ʌ, ɐ, o; ɛ, ə, ʌ; a; ei, əu/. 音節構造は、最大で CCCV である。語声調の体系を持ち、高降 (´), 中平 (˘), 低昇 (ˊ) の三種類が区別される。

ダバ語の基本構成素順はSOVである。後置詞型の言語であり、文法関係は名詞に後続する助詞によって表示される。ただし文法関係が意味から明らかな場合は助詞は用いられない。

名詞句内部の語順は、(1) のようになる。すなわち、名詞修飾要素は原則として主要部名詞の後に置かれ (N A), 限定詞は前置される (Det N)。数詞と類別詞がこの順で名詞句末尾に置かれる (N Num Cl)。

(1) Det N A Num Cl

動詞述部の構造は、(2) のように表すことができる。助動詞のある文では (2a), ない文では (2b) のようになる。このうち義務的な要素は動詞語幹 (VS) のみである。接頭辞1 (P1) は方向接辞、接頭辞2 (P2) は否定接辞である。動詞語幹ないし助動詞語幹 (AuxS) に付加される接尾辞 (Suf) は、視点を表示する⁶⁾。文末助詞 (Pcl) は、法・証拠性・モダリティを表示する。

3) 無声閉鎖／破擦音は音節初頭および前節子音 N, ʔ のあとでは帯気化する。有声閉鎖／破擦音は音節初頭および前節子音 ʔ のあとでは無声化する。

4) 初頭子音連続において主子音よりも前に現れる音を前接子音と呼ぶ。N は鼻音要素であり、その有声性および調音点は後続の主子音に一致する。H は前気音ないし摩擦音として実現する。鼻音の前では後続音と同じ調音点の無声鼻音となる。ʔ は声門ないし後続音と同一調音点の無声閉鎖音である。

5) 借用語の一部にのみ鼻母音が観察される。

6) 後述の「離接標識」に相当し、発話源の視点が置かれなことを表示する。

(2) a. P1-VS + P2-AuxS-Suf + Pcl

b. P1-P2-VS-Suf + Pcl

このほか、ダバ語メト方言の概略については拙稿(白井 2006b)を参照していただきたい。

2 問題点

本節では、まず、考察の主たる対象となる二系列の助動詞を示す。さらに、先行研究の分析および他の言語に見られる対応する現象を紹介した上で、ダバ語メト方言の現象を分析するに当たっての問題点を明らかにする。

2.1 助動詞の分類

先述(2)のように、ダバ語の動詞述部においては、動詞のあとに助動詞が後続しうる。助動詞は時制・アスペクトを表す機能を持つが、それぞれの時制・アスペクトについて2種類から3種類の形態的に対応する助動詞が存在する。本稿ではこれらの助動詞を、形態上の特徴から、A系列、B系列の二系列に分類する。A系列は、助動詞語幹そのままの形式であり、B系列は、助動詞語幹に接尾辞が付加された形式である。B系列において付加される接尾辞の形態は、非完了類(未完了、反復)の助動詞については -e, 完了類(完了、経験、過去)の助動詞については -a と分析できる。本稿では、これらB系列を形成する接尾辞を「離接標識(disjunct marker)」と呼ぶ⁷⁾。表1に両系列を持つ助動詞の一覧を示す。

形態論上、助動詞は、動詞に付加される後接語である。ダバ語の後接語は、直前の動詞語幹と結びついて一つの音韻語を形成するなど、自立語とは異なる振る舞いを見せる。例えば動詞語幹 'ji 「手伝う」に未完了の助動詞 'dε が付加されると、通常は二

7) 「離接」とは、§ 2.3.1 で言及する「接合／離接(conjunct/disjunct)」の範疇における離接形を指す。

表1 A系列/B系列の助動詞

| | 非完了類 | | 完了類 | | |
|---|------------------|---------------------|-------------------|------------------|----------------------|
| | 未完了 | 反復 | 完了 | 経験 | 過去 |
| A | ˈdʌ | ˈndu | ˈwu | ˈnʌ | ˈɲje ; ˈɲcie |
| B | ˈdɛ //ˈdʌ-ɛ// | ˈndʊɛ //ˈndu-ɛ// | ˈwua //ˈwu-a// | ˈna //ˈnʌ-a// | ˈɲcia //ˈɲcie-a// |

† 2音節の形式を持つˈwua, ˈɲje, ˈɲcie, ˈɲcia, ndʊɛは1音節語として現れることもあり、それぞれˈwa, ˈɲji, ˈɲci, ˈɲcja, ˈndweとなる。

音節の音韻語を形成しˈji=dɛ「手伝っている」となる。なお、直前の動詞が2音節以上からなる場合は、助動詞固有の声調が現れることが多い(例: ˈɲpuɛ「泣く」; ˈɲpuɛˈdɛまたはˈɲpuɛ=dɛ)。

助動詞が接辞でなく語であることは、次のような例から確認できる。(3a)では、否定接頭辞を伴った助動詞ˈmɛ-nʌと動詞語幹ɕiとの間に、副詞ɲiが現れている。(3b)では副詞が動詞の直前に置かれている⁸⁾。すなわち、出現位置がある程度自由な副詞ɲiは語であり、動詞との間に語の介在を許す助動詞ˈnʌは、動詞に付加される接尾辞ではなく動詞に後置される語であると言える⁹⁾。

- (3) a. ˈɲa ˈɲɕeɲɕe =ji ˈmedo =je ˈgi-ɕi =ɲi ˈmɛ-nʌ
私 先生 =ために 花 =[類別] [方向]-買う =[強調] [否定]-[経験.A]
「私は先生に1本の花を買ってあげたことさえない」
- b. ˈɲa ˈɲɕeɲɕe =ji ˈmedo =je =ɲi ˈgi-ɕi ˈmɛ-nʌ
私 先生 =ために 花 =[類別] =[強調] [方向]-買う [否定]-[経験.A]
「私は先生に花のひとつも買ってあげたことがない」

2.2 先行研究

まず、ダパ語における二系列の助動詞の使い分けについて、先行研究の分析を見て

8) 一般には(3b)の語順が好まれる。

9) 服部(1950: 13)の、語(自由形式)と接辞(附属形式)を判別するための「原則二」「二つの形式の間に別の単語が自由に現れる場合には、その各々は自由形式である。」に基づく。

おく。

ダト方言を扱った先行研究(黄 1990b, 1991)において、両系列の助動詞に対応する形式¹⁰⁾の使い分けは、人称の一致と証拠性の表示という二つの側面から説明されている。

人称の一致に関して、黄(1990b, 1991)は、主語が1人称の場合はA系列が、3人称の場合はB系列が用いられるとしている¹¹⁾。2人称の扱いは疑問文であるかどうかによって分裂し、疑問文ではA系列(1人称形式)が、陳述文ではB系列(3人称形式)が用いられる。完了の助動詞`wu/wuaを例に、先行研究の主張をまとめると表2のようになる。なお、筆者によるメト方言の観察と合致しない部分については丸括弧を付した。

証拠性については、黄(1990b, 1991)は過去の「3人称」形式にのみ区別が見られるとしている。表1に示した助動詞のうち、`ncieに対応する形式は「動作・行為の過程を直接見た」場合に、`nciaに対応する形式は「動作・行為の結果を直接見た」場合に用いられるという。この問題については§4.3で述べる。

2.3 主語の人称との相関について

2.3.1 人称の分裂—発話源/非発話源の区別—

先行研究がダト方言に関して指摘しているように、ダパ語における二系列の助動詞の機能は、主語の人称と一定の相関関係がある。ただし、人称の区別の仕方は文のタ

表2 先行研究の見解 : 主語の人称との一致

| | 陳述 | | | 疑問 | | | |
|---------|-----|-----|-----|-----|---|-----|--------|
| | 1 | 2 | 3 | 1 | 2 | 3 | |
| A(`wu) | ○ | (×) | (×) | (-) | ○ | (×) | →「1人称」 |
| B(`wua) | (×) | ○ | ○ | - | × | ○ | →「3人称」 |

†「○」は容認可、「×」は容認不可とされているもので、「-」は黄(1990b, 1991)に言及がないもの。

表中の括弧は筆者による。

10) 黄(1990b, 1991)は本稿で言う「助動詞」をすべて「接尾辞」としている。

11) 表1に示した助動詞のうち、過去の助動詞を除く、未完了、反復、完了、経験の助動詞については、A系列が先行研究の言う1人称形式、B系列が3人称形式に対応する。過去の助動詞については、`ncieに対応する形式が1人称形式、`ncieに対応する形式が3人称形式とされ、`nciaは証拠性を表す形式とされる。詳しくは第4.3節で述べる。

イプによって分裂する。すなわち、(i) 陳述文における話し手、(ii) 疑問文における聞き手、(iii) 伝達文（引用型埋め込み文か伝聞の文末助詞を伴う文）における本来の話し手が同じ扱いを受け、これらが主語となる文ではA系列の助動詞が用いられるという強い傾向がある。(4) は、過去時制A系列の助動詞の用例である¹²⁾。ダバ語には過去の助動詞が複数存在するが、意図的な行為を述べる陳述文において主語が1人称である場合(4a)、疑問文において主語が2人称である場合(4b)、伝達文内部において主語が情報源と一致する場合(4c)の三つの場合に同じA系列の助動詞が用いられる。

- (4) a. `ɲa `mu=wu ʔa-dɔ `mɛ-ɲɪ
 [1.単.強調] 兄弟=を [方向]-ぶつ [否定]-[過去.A-1]
 「私は兄弟を殴ってはいません」
- b. ʔno ʔɛnɔ ʔmɛnko=rɔ ʔnge ʔa-mwi ɲɪɛ =mi
 [2.単] 昨日 病院=の 戸 [方向]-閉める [過去.A-1] =[疑問]
 「あなたは昨日、病院の戸を閉めましたか？」
- c. ɲima ʔtu ʔozo=wu ʔa-dɔ `mɛ-ɲɪ ʔde, ʔoro
 [名] [伝聞主語] [名]=を [方向]-ぶつ [否定]-[過去.A-1] [伝聞] [3.単]
 ɲɪɔ ʔi=ɔɛ, ʔa-dɔ ɲɪɔ
 嘘をつく =[未完.B] [方向]-ぶつ [過去.B]
 「ニマはロゾを殴っていないと言っているが、あいつは嘘をついている。(あいつがロゾを) 殴ったんだ」

一方、(i) ~ (iii) 以外が主語となる場合は、次のように、B系列の助動詞が用いられる例が多く見られる。

- (5) a. ʔɛnɔ ɲɔɔma ɲima=da ʔa-ɲɛ ɲɪɔ
 昨日 [名] [名]=を [方向]-叱る [過去.B]

12) (4a, c) に現れる ɲɪ と (4b) に現れる ɲɪɛ はA系列の過去の助動詞として機能する形態素の異形態である。

「昨日、ドマがニマを叱った」

b. ʔjɛɲa ʔɔoro ʔnge ʔa-mwi ɲcia =me
昨日 [3.単] 戸 [方向]-閉める [過去.B] =[疑問]

「彼は昨日、戸を閉めましたか？」

c. ʔaŋʂa ʔɕje=rɛ, ʔnguʔtɕi-rɛ ʔŋkatɕa ʔa-ɕje ʔwua ʔde
お父さん 言う=[状態] 指導者-[複] 話 [方向]-言う [完了.B] [伝聞]

「お父さんが言うには、指導者たちの話は終わったそうだ」

このように、相関する人称が2つのグループに分けられ、かつ、文のタイプによって異なる現象は、ネワール語などに見られる接合／離接 (conjunct/disjunct) システム (Hale 1980 などの用語) と一致する。このシステムの特徴は、一見すると人称と関係のある2種類の形式が文の主要部において区別されること、その形式と関係する人称が陳述・疑問・伝聞という法の違いや意図性の有無によって異なることなどである (白井 2006a: 254–255)。人称との相関から言えば、A系列は接合形 (conjunct), B系列は離接形 (disjunct) に相当する。

接合／離接システムにおいて、(i) 陳述文における話し手、(ii) 疑問文における聞き手、(iii) 伝達文における本来の話し手をまとめて扱うにあたって、Curnow (1997: 189–192) はこの三者を *locutor* と呼んで、それ以外の *non-locutor* と区別している。本稿でも、これに倣って、「発話源 (*locutor*)」「非発話源 (*non-locutor*)」という用語を用いる¹³⁾。

ネワール語に関する研究の中で、Hargreaves (1991: 32) は発話源／非発話源に相当する人称の区別を “epistemic authority” という概念から説明している。陳述発話行為においては話し手はその内容に関する *epistemic authority* となると考えられる。それに対し、疑問発話行為においては、話し手は情報が自分ではなく聞き手に帰属しているものとしており、聞き手が *epistemic authority* であると想定されるという。

13) 白井 (2006a, b) などでは *locutor* を「発話者」としていたが、*speaker* (話し手、話者) と紛らわしいため、本稿では「発話源」と改める。

2.3.2 人称の一致を示さない例

前述のように、ダバ語ダト方言に関する先行研究において、二系列の助動詞が主語との一致の機能を持つという分析がなされている。さらに、接合／離接システム一般に関しても、人称表示の一種であるという見解が出されることがある (Aikhenvald 2004: 123–127, Cysouw 2003: 41–45)¹⁴⁾。しかし、本稿で扱うダバ語メト方言において、いずれの述部形式を用いるかは主語が発話源であるかどうかによってのみ決定されるものではない。本節では、「主語が発話源であればA系列（接合形）、主語が非発話源であればB系列（離接形）が用いられる」という人称の一致の仮説に対し、反例が存在することを示す。

次の例に示すように、完了の助動詞は `wu がA系列、`wua がB系列である。意図的な動作を述べる文において、発話源が主語となる場合は前者が、非発話源が主語となる場合は後者が用いられる。

- (6) a. (ŋa) ʔzama ʔgi-ʔdzi `wu/*`wua
[1.単] 食べ物 [方向]-食べる [完了.A]/[完了.B]
「(私はもう) ご飯を食べました」
- b. ʔno ʔzama ʔgi-ʔdzi `wua =mo
[2.単] 食べ物 [方向]-食べる [完了.B] =[確認]
「あなたは (もう) ご飯を食べましたね」
- c. ʔgoro ʔzama ʔgi-ʔdzi `wua
[3.単] 食べ物 [方向]-食べる [完了.B]
「あの人は (もう) ご飯を食べました」

14) 接合／離接システムを人称の一致とする見解の背景として、人称の制限が非常に強いネワール語の研究が最初に進められたことがある。現代チベット語やダバ語に見られる類似の現象は、人称の一致として説明することはできない。本稿では、DeLancey (1990) などが現代チベット語における類似の現象をも接合／離接システムの一つとして扱っているのに倣い、「接合／離接システム」を人称一致型でないものも含む概念として捉える。接合／離接システムの類型については白井 (2006a: 190–255) を参照していただきたい。

ところが、次に示すように、非発話源が主語であってもA系列が用いられる文がしばしば見られる。

- (7) a. ʔaci ʔanta ʔa ʔnɛŋgi ʔa-ɕje ʔwu/*ʔwua
 [名] さっき [1.単] に向かって [方向]-言う [完了.A]/[完了.B]
 「タシはさっき私に話してしまった」
- b. ʔɔhne ʔa-ɔo ʔzama ʔga-ʔdzi ʔwu
 [3.双] [1.単]-ところ 食べ物 [方向]-食べる [完了.A]
 「その2人は私のところでご飯を食べた」
- c. no ʔzama ʔga-ʔdzi ʔwu mo, xe ʔga-ʔdzu
 [2.単] 食べ物 [方向]-食べる [完了.A] [確認] もはや [方向.禁止]-食べる.[命令]
 (食事の後すぐにまたお菓子を食べている子供に対して)
 「あなたはもうご飯を食べましたよ、もう食べてはいけません」

(7a) は、話し手に対して直接行われた行為について述べている。この場合、B系列の助動詞を用いると不自然と判断される。(7b) は、話し手の家で、話し手の目の前で食事が行われた（恐らくは話し手が料理を用意し、一緒に食べた）ことを含意している。(7c) のように聞き手の行為についてA系列助動詞が用いられることはやや稀である。(7c) は、聞き手（子供）が食事を済ませたことを話し手が熟知していることを強調して述べている例である。

疑問文に関しても、人称の一致とは言えない例が見られる。次の例では、主語が3人称であるため、表2に示した先行研究の見解からはB系列の助動詞のみが容認されると予想される。ところが実際には、(8b) のようにA系列の形式を用いることも可能である。

- (8) a. ʔɔro ʔdzədi ʔde=pje=rə¹⁵⁾ ʔa-lo ʔwua =me
 [3.単] 本 1=[類別]=の [方向]-読む [完了.B] =[疑問]

15) この例では属格助詞 *rə* が名詞句の右端を表示する機能を担っているのではないかと考えら

「彼は一冊の本を読み終わりましたか？」

b. ʔoro ʔdzədi ʔde=pe=rə ʔa-lo ʔwu=me

[3.単] 本 1=[類別]=の [方向]-読む [完了.A]=[疑問]

「彼は一冊の本を読み終わりましたか？」

また、接合／離接システムでは、一般に、非意図的内容を述べる文では接合形が用いられない。ダパ語にもこれと同様の現象がある。すなわち、(7), (8) とは逆に、主語が発話源であってもB系列が用いられることがあるということである。なお、黄 (1990b, 1991) は本動詞が意志動詞か無意志動詞かによって異なるパラダイムをたてている。

(9) ʔa ʔnʔanke ʔdo-nno ʔwuʔwua

[1.単] ダパ語 [方向]-忘れる [完了.A]/[完了.B]

「私はダパ語を忘れてしまった」

2.4 証拠性との相関について

非発話源が主語である場合にA系列の助動詞を用いる (7) の例は、いずれも、話し手がイベントの場に居合わせ、その経緯をはっきり知っているという場合に用いられている。また、(6a) のように話し手による行為を述べる陳述文でも、話し手はそのイベントを直接知っていると言える。このことから、黄 (1990b, 1991) が一部の助動詞について記述しているように、話し手がその情報をどのように知ったかという、証拠性 (evidentiality) の範疇との相関が考えられる。すなわち、A系列は直接認識と、B系列は間接認識と関係しているとする仮説である。

しかし、A系列とB系列の使い分けは、単に直接認識しているかどうかという基準のみで説明することもできない。次の例では、話し手が直接認識している (10a) ではB系列が用いられ、直接視認することなく間接的な証拠に基づいて主観的に述べている (10b) ではA系列の助動詞が用いられている。

れる。

(10) a. ʼmoʔgu ʼa-de =de

雨 [方向]-降る =[未完.B]

「(屋外にいて、事実として) 雨が降っている」

b. ʼmoʔgu ʼa-de =da =ba

雨 [方向]-降る =[未完.A] =[推量]

「(屋内で雨音を聞くなどして) 雨が降っているようだ」

以上のことから、ダパ語メト方言における二系列の助動詞は、人称や証拠性の範疇と一定の相関関係を見せるものの、これらの概念によって一貫的な説明をすることはできないことが分かる。

3 未完了の助動詞：記述と分析

本節では、まず、未完了の助動詞 ʼda/ʼde¹⁶⁾ について、用例を観察する。その上で、二系列の使い分けを中心に考察を行う。

この一対の助動詞 ʼda/ʼde は、意思決定済みの未来の行為¹⁷⁾、現在継続中のイベントなど、まだ完了していない事態を述べる際に広く用いられる。次節以降、機能別にこの助動詞の用例を示す。§ 3.1 では未来における意図的な行為、§ 3.2 では現在継続中の意図的な行為、§ 3.3 では過去の継続的な行為、§ 3.4 では非意図的な内容を述べる場合について述べる。

なお、形式上、メト方言の ʼda/ʼde は、黄 (1990b: 78) の記述するダト方言における意志動詞の“現行体” (現在継続相) -tʂə⁵⁵ (1人称) /-tʂə⁵⁵ (3人称) に対応する¹⁸⁾。

16) 高降調の ʼda/ʼde という異形態も観察される。高降調の形式は強調形と考えられる。

17) これは星 (1997: 178) がチベット語ラサ方言の非完了継続の述部形式 -ki + ʼyöo について「準備段階の継続状態」としている機能に類似している。

18) 黄 (1990b: 78-9) は、意志動詞の未来時制 (将行体) を表す際には -je⁵⁵ (1人称) /-tʂə⁵⁵ (3人称)、無意志動詞の現在継続相を表す際には -ze⁵⁵ (1人称) /-tʂə⁵⁵ (3人称) という形式が用いられるとしている。しかしここではまず、メト方言の ʼda/ʼde という形式がどのように用いられるかを観察し、その機能を分析する。

3.1 未来における意図的な行為

次の例 (11) ~ (19) は、未来において意図的に行われる動作について述べる際に 'qΛ/dε が用いられる例である。

次の (11) のように、話し手もしくは話し手を含む集団による意図的な行為が未来において行われることを述べる場合、通常はA系列の 'qΛ が用いられる。

- (11) a. 'somuŋi ˉŋje ˉtseri=wu 'daja 'ce=qΛ/??dε
 明日 [1.複] [名]=に おかね 与える =[未完.A]/[未完.B]
 「明日、私たちはツェリにお金をあげます」
- b. 'somuŋi 'ŋa ˉno=wu 'daja 'ce=qΛ/*dε
 明日 [1.単] [2.単]=に おかね 与える =[未完.A]/[未完.B]
 「明日、私があなたにお金をあげます」

1人称による意図的な行為であっても、次の例のように対比的に述べる場合は、B系列の 'dε が用いられうる。

- (12) ˉŋje ˉtseri=wu 'daja 'ce=dε/qΛ, ˉno 'ce 'cu=mε
 [1.複] [名]=に おかね 与える =[未完.B]/[未完.A] [2.単] 与える 要する =[疑問]
 「私たちはツェリにお金をあげるんですが、あなたはあげたいですか？」

話し手以外に向けられる行為が2人称・3人称によって行われる場合は、(13) のようにB系列の 'dε が用いられる。どのような文脈であっても、(13) の各例においてA系列助動詞が用いられることは難しい。

- (13) a. 'tsəbi ˉciŋtci=wu ˉŋwe ˉtseri=wu 'daja 'ŋgo 'ce=dε/*qΛ 'mo
 次 週=に [2.複] [名]=に おかね 少し 与える =[未完.B]/[未完.A] [確認]
 「来週、あなた方はツェリにお金を少しあげるんですね」

- b. 'somuɲi ʔsonba ʔseri=wu ˈdaja ˈŋgo ˈce=dɛ/*dʌ
 明日 社長 [名]=に おかね 少し 与える=[未完.B]/[未完.A]
 「明日、社長がツェリにお金を少しあげます」
- c. 'somuɲi ʔsonba ˈno=wu ˈdaja ˈŋgo ˈce=dɛ/*dʌ
 明日 社長 [2.単]=に おかね 少し 与える=[未完.B]/[未完.A]
 「明日、社長があなたにお金を少しくれます」

次の(14)は、話し手に向けて行われる予定の未来の行為について述べる例である。(14a)のように主語が聞き手である場合、A系列の'dʌは用いられない。第三者によって話し手に対して行われることが決まっている行為についても、(14b)のようにそれを予定として客観的に述べる場合は'dʌは不適格と判断される。

- (14) a. ʔsəbi ʔɲintɕi=wu ʔno ˈŋa=wu ˈdaja ˈŋgo ˈce=dɛ/*dʌ ˈmo
 次 週=に [2.単] [1.単.強調]=に おかね 少し 与える=[未完.B]/[未完.A] [確認]
 「来週、あなたは私にお金を少しくれるんですね」
- b. 'somuɲi ʔsonba ˈŋa=wu ˈdaja ˈŋgo ˈce=dɛ/*dʌ ˈmo
 明日 社長 [1.単]=に おかね 少し 与える=[未完.B]/[未完.A] [確認]
 「明日、社長が私にお金を少しくれるよね」

3.1.1 非発話源主語とA系列助動詞の共起

未来の意図的行為を表す陳述文で、非発話源が主語となる場合、ここまで見てきた例では、いずれも'dɛが用いられていた。しかし、文脈によっては、主語が3人称の陳述文でA系列の'dʌが用いられる場合もある。これには3つのパターンがある。

[1] 話し手自身が関わる事態を推量する場合

次の例は、第三者から話し手に対して行われる予定の行為について、話し手の推測を述べる文である。これが、3人称主語とA系列助動詞が共起しうる第一のパターンで

ある。(14b)とは異なり、この例では推量の文末助詞 ba が用いられるとともに、'dΛ が容認される¹⁹⁾。これは、(10b)のように話し手の主観的な推測として述べる場合に 'dΛ を用いることが可能であるためと考えられる。

- (15) 'somuŋi ʔsonba ʔna=wu 'daja ʔngo 'ce =dε/(?) dΛ ʔba
明日 社長 [1.単]=におかね 少し 与える =[未完.B]/[未完.A] [推量.強調]
「明日、社長が私にお金を少しくれるらしい」

この、動詞 + 'dΛ + ba という文末表現は、(14a)のように主語が2人称である場合は用いられない。第三者から話し手への行為については、主観的な推測をして述べることもありうるのに対し、聞き手の行為について自分の推測で述べることは、待遇表現の一種²⁰⁾として避けられるのではないかと考えられる。

また、第三者同士の間で行われる行為について述べる(13b)のような例についても、動詞 + 'dΛ + ba は用いられにくい。次のように、'dε が用いられる方がより一般的である。

- (16) 'somuŋi ʔsonba ʔseri=wu 'daja ʔngo 'ce =dε ʔba
明日 社長 [名]=に おかね 少し 与える =[未完.B] [推量.強調]
「明日、社長がツェリにお金を少しあげるらしい」

19) 協力者の判断に揺れがある。'dε は確実に容認可能であるのに対し、'dΛ を用いた文はわずかに容認度が低いようである。

20) 田窪・金水(1996: 72)では、日本語の「よ」によって提示される知識に関して、「この知識が前もって、自分の記憶にある場合、現場から得られたものである場合は、相手に教えるという発話の力が語用論的に生じる」としている。「自分の記憶にある」「現場から得られた」知識を述べる際、ダバ語ではA系列助動詞が用いられる。田窪・金水(1996)の説明を援用するなら、A系列助動詞を用いると「教えてやる」というニュアンスがあるため、相手が当然知っていることに関して用いるのは失礼であるという語用論的制限が加わる、と考えられる。この現象を、本稿では待遇表現の一種と捉える。

[2] 話し手による意志決定

3人称主語とA系列助動詞が共起しうる第二のパターンは、意志決定に話し手自身が関わっているという認識のもとで発話される文である。次の(17a, b)では3人称の主語「私の娘」に対してA/Bともに用いることが可能だが、A系列が用いられる場合は、「娘が作るということを私が決めた」という意味合いが出るという²¹⁾。

未来の事態に関する意志の決定に話し手が関与している、という点で、(17b)は発話源自身の意図的行為について述べる(11)と共通している。

(17) a. ʼami ʼŋa=ra ʼzəntʃi ʼle ʼmə=ɕe

夕方 [1.単]=の娘 包子 作る =[未完.B]

「今晚、私の娘は包子を作ります」(単に未来の事態として)

b. ʼami ʼŋa=ra ʼzəntʃi ʼle ʼmə=ɕA

夕方 [1.単]=の娘 包子 作る =[未完.A]

「今晚、私の娘は包子を作ります」(娘が包子を作ることを話し手が決めた)

[3] 話し手を含む集団の予定

第三のパターンとして、主語が3人称である文が、話し手ないしは話し手を含む集団の予定を表しているという場合が挙げられる。

次の例で、(18a, b)の違いについて観察する。(18a)のように`ɕeを用いるのは、客観的事実として自分の子供の予定を述べている場合である。(18b)のように`ɕAを用いると、家族(すなわち話し手を含む集団)の予定の一部として、子供の予定を述べているという含意がある。同様に、B系列を用いた(18c)では第三者の行為が客観的に述べられているのに対し、A系列を用いた(18d)では、第三者が訪ねてくるのが話し手の予定として述べられている。後者は、来つつある人物にではなく、話し手自身がその事態に備えていることに焦点が置かれた文となる。

21) (17a, b)は、星(1997: 141[3])を参考にした作例である。チベット語では自分の子供など話し手にとって身近な人物の行為について述べる場合は、接合形に相当する述部形式がとられる方が自然である。それに対し、ダバ語では行為者と話し手との間柄が述部形式を決定するわけではなく、話し手と行為の成立との関係が問題となる。

- (18) a. 'somuŋi 'ŋa=rə bəŋjə ʔŋeŋge-ɔo ʔi ʔi=dɛ
 明日 [1.単]=の 子供 先生-ところ 手伝う 行く =[未完.B]
 「明日、うちの子は先生のお宅に手伝いに行きます」(単に未来の事態として)
- b. 'somuŋi 'ŋa=rə bəŋjə ʔŋeŋge-ɔo ʔi ʔi=dʌ
 明日 [1.単]=の 子供 先生-ところ 手伝う 行く =[未完.A]
 「明日、うちの子は先生のお宅に手伝いに行きます」(家族の決定事項として)
- c. ʔore ʔo=dɛ
 [3.複] 来る =[未完.B]
 「彼らはもうすぐ来る(来つつある)」
- d. ʔŋe-ɔo ʔde=i ʔo=dʌ
 [1.複]-ところ 1=[類別] 来る =[未完.A]
 「うちに人が一人来ることになっています」

3.1.2 疑問文

疑問文においては、聞き手が主語である場合にA系列の ʔdʌ が用いられる。次の(19a)では聞き手が予定している行為について ʔdʌ を用いて尋ねている。これに対し、(19b)では第三者の未来の行為について ʔde を用いて聞き手に尋ねている。発話源/非発話源 (locutor/non-locutor) の術語を用いるなら、疑問文における発話源は、聞き手、すなわち、疑問に答えることが期待される者である。

- (19) a. ʔno ʔami ʔe ʔme=dʔi=me
 [2.単] 今晚 包子 作る =[未完.A]=[疑問]
 「あなたは今夜、包子を作りますか？」
- b. 'somuŋi 'geza ʔŋe=ʔi ʔkinbi ʔci=dɛ=me
 明日 [名] [1.複]=のために 桃 買う =[未完.B]=[疑問]
 「ケザは明日、私たちに桃を買ってくれるでしょうか？」

未来における非意図的な行為や事態について述べる際は、助動詞を用いない未来の形式 *-are* が用いられるのが普通である。また、それについて尋ねる疑問文では、一般に可能の助動詞 *ʼndu/ʼndæ* が用いられる (§ 4.4)。*ʼqʼde* によって未来の事態を表現する場合は、それを実現しようという意図に主眼が置かれていると考えられる。

3.1.3 伝達文

本稿では、引用型埋め込み文および伝聞の文末助詞を伴う文を、伝達文としてまとめて扱う。伝達文の内部においては、伝達された内容についての本来の話し手 (original speaker) が陳述文における話し手と同じ扱いを受ける。つまり、発話源 (locutor) という概念を用いるなら、(20a) では「あなた」が、(20b) では「社長」が、(20c) では「お父さん」が、引用文中における発話源として扱われる。それ以外の参加者はすべて非発話源である。(20a, b) においては、本来の話し手と引用文中の主語が一致する。これらの例では、A系列助動詞の異形態である *q̄i* が用いられている。(20b) に見られる *tu* という語は、本来の話し手と一致し、かつ3人称であるような伝達文中の参加者を指示する。一方、(20c) は「お父さん」が客観的事実として述べた第三者の予定について、伝聞形式で述べている例である。話し手にとっての情報源である「お父さん」と、伝達内容の主語である「指導者たち」は一致しない。助動詞としては、B系列の *ʼde* が用いられている。

- (20) a. *ʼno ʼsomuɲi ʼɲoro=wu ʼdaja ʼngo ʼce=q̄i ʼde=mo*
 [2.単] 明日 [3.単]=に おかね 少し 与える=[未完.A] [伝聞]=[確認]
 「あなたは明日、彼にお金を少しあげるそうですね」(聞き手が言っていた)
- b. *ʼtsonba ʼtu ʼsomuɲi ʼq̄aci=wu ʼdaja ʼngo ʼce=q̄i ʼde*
 社長 [伝聞主語] 明日 [名]=に おかね 少し 与える[未完.A] [伝聞]
 「社長は明日、タシにお金を少しあげるそうだ」(社長が言っていた)
- c. *ʼaɲja ʼɕje=re, ʼnguʔt̄ci-re ʼsomuɲi ʼhgenbe=da ʼndzendza ʼvo=q̄e=de*
 お父さん 言う=[状態] 指導者-[複] 明日 寺=に 参拝 来る=[未完.B]=[伝聞]
 「お父さんが言うには、明日、指導者たちがお寺に参拝に来るそうだ」

3.1.4 まとめ

ここまでに見てきたことをまとめると、次のようになる。

(21) 未完了継続相の 'dq_A (A) / dq_B (B) が未来の意図的行為について用いられる場合：

- i. その意思決定に発話源が直接関与しているか、その行為が発話源によって予定されているものであれば、Aが用いられる。
- ii. (i) に当てはまらない場合は、Bが用いられる。
- iii. (i) に当てはまらなくても、発話源に直接関わり合い、かつ、第三者によってなされる予定の行為について主観的推測を述べる場合は、Aが用いられうる。
……(15)
- iv. (i) に当てはまっても、対比的に述べる文ではBが用いられうる。……(12)

発話源／非発話源の区別が重要な基準となっているが、決して人称の一致ではないことが分かる。特に陳述文において、人称の一致とは異なる例が確認できた。そのほかにも、意図や関与の有無、主観的か対比的かといった話し手の態度が関わっている。この現象について、後の § 3.5 において「視点」の概念による説明を試みる。

§ 3.1.1 で観察した、非発話源主語のときA系列助動詞が用いられる例のうち、[2] (話し手による意志決定) および [3] (話し手を含む集団の予定) については、発話源が主語である場合と共に (i) によって説明することができる。

(iii) に当てはまる例、例えば (15) において、なぜA系列助動詞が容認されるのかについては考察が必要である。これは、(15) のように話し手自身が関わる事態である場合、その情報をより優位に知っていることが自然に想定できるということと関係あるのではないかと考えられる。聞き手が関わる事態や第三者のみが関わる事態については、特にそれが未実現の内容であれば、聞き手は通常話し手と同等かそれ以下の情報しか持ち合わせないことが想定される。その場合は、B系列の助動詞しか用いられない。逆に、話し手自身が関わる未実現の事態に関しては、他者による行為であっても、主観的観測であることを表明しつつ述べるのが可能になる。

また、(iii) でAが容認されるのは主語が第三者である場合に限られ、主語が聞き手である場合はAが容認されないことについて、待遇表現としての説明を試みた。視点ないしはその関連概念と待遇表現の関係については、日本語の研究において指摘がなされている。鈴木 (1997: 53-69) は、日本語において普通体で話す場合と丁寧体で話す場合で「聞き手の領域」と「話し手の領域」の関係が異なるとしている。さらに、丁寧体で話す場合は、一般に、聞き手の欲求・願望・意志・能力・感情・感覚などに踏み込んだ発話がなされないことを指摘している。益岡 (1997: 9-10) は、日本語における「*花子はとても悲しい。」のような人物の心理的状況を表す表現に関わる人称制限について、「他者の内的世界の事態は直接には認識することができないという認識論的な見方によってではなく、他者の私的領域を侵害することは適切ではないという語用論的な見方によって説明されるべきである」と主張している。本稿では、ダバ語においても同様に、話し手から聞き手への配慮が語用論のレベルで言語表現に反映されると考える。

3.2 継続中の意図的な行為

次に、すでに実現していて現在も継続中の事態を述べる場合について考察する。

3.2.1 発話源による行為

発話源の行為について述べる際は、(22) に示すようにA系列が用いられる。発話源の関与しない行為について述べる際は、(23) のようにB系列が用いられる。

(22) a. ʔŋa ʔdzuu ʔjo=wu ʔga-ji =dʌ/*dɛ
 [1.単] 今 友達=を [方向]-手伝う =[未完.A]/[未完.B]
 「私は今、友達を手伝っています」

b. ʔŋa ʔno=wu ʔga-ji =dʌ/*dɛ
 [1.単] [2.単]=を [方向.完了]-手伝う =[未完.A]/[未完.B]
 「私はあなたを手伝っています」

(23) a. ˈno ˈdzuu ˈngɛngɛ=wu ˈgɔ-ji =dɛ =mo
 [2.単] 今 先生[強調]=を [方向]-手伝う =[未完.B] =[確認]

「あなたは今、先生を手伝っていますね」

b. ˈdɑci ˈdzuu ˈtser=wu ˈgɔ-ji =dɛ/*dɔ
 [名] 今 [名]=を [方向]-手伝う =[未完.B]/[未完.A]

「タシは今、ツェリを手伝っています」

3.2.2 発話源の関与

発話源に向けられている行為について述べる際には、状況が少し異なる。(24a)では、非発話源である聞き手の行為が発話源である話し手に向けられており、*dɛ* が用いられる。聞き手の行為にB系列を用いるのは、未来の事態について述べる (14a) と同様である。一方、第三者が話し手に対して行っている行為について述べる (24b) では、A系列を用いる方が自然である。特別な文脈なしにこの文を発話する場合、B系列は通常用いられない。

(24) a. ˈno ˈdzuu ˈŋa=wu ˈgɔ-ji =dɛ/*dɔ =mo
 [2.単] 今 [1.単]=を [方向]-手伝う =[未完.B]/[未完.A] =[確認]

「あなたは今、私を手伝ってくれていますね」

b. ˈdɑci ˈdzuu ˈŋa=wu ˈgɔ-ji =dɔ/*dɛ
 [名] 今 [1.単]=を [方向]-手伝う =[未完.A]/[未完.B]

「タシは今、私を手伝ってくれています」

主語と目的語の関係が (24b) と同じであっても、未来の事態について述べる (15) ではB系列が全く問題なく用いられる。これは、事態が実現されているかいないかの違い (realis/irrealis) によると考えられる。まだ実現されていない事態がどのように決定されているかについては自分の認識の範囲内でないのに対し、すでに実現されている事態であれば、そこに参与している限り、その事態は必ず自分の認識できる範囲内にある。(24b) では第三者が手伝いをするというイベントに話し手が実際に参与して直

接に事態を認識している。

ここで、聞き手が行為者である場合にA系列が用いられにくいという点についても、関与の度合いと待遇表現という観点から説明できるだろう。(24a)においては、話し手もイベントに参加してはいるが、行為者は聞き手である。聞き手が引き起こしたイベントである以上、イベントへの関与の度合いは聞き手の方が大きいと捉えるのが自然である。A系列の 'd_A を用いれば、聞き手の関与を無視し、話し手の参与に重点を置いたかのような発話態度になる可能性がある。そのため、聞き手に配慮するためにあえてB系列助動詞を用い、自分の参与をほかして述べるのが好まれるのではないかと考えられる。

上の(24b)は、文脈によってはB系列を用いてもよいと判断されうる。例えば次のように、疑問に答える文であれば、B系列の 'd_E を用いても問題ない。

(25) A: 'd_Aci 'ge 'da-t_{so}-a 'ra
[名] どこ [方向]-行く-[離接] [状態.疑問]
「タシはどこへ行ったんですか？」

B: 'd_Aci 'dzuu 'ŋa=wu 'ga-ji =d_E/d_A
[名] 今 [1.単]=を [方向]-手伝う =[未完.B]/[未完.A]
「タシは今、私を手伝ってくれています」

また、話し手にとって「今まさに目の前で進行中」の事態ではない場合は、B系列助動詞が自然に用いられる。次の例は習慣的に繰り返し生起する事態を述べる例で、'd_E が用いられている。

(26) 'ŋoro 'rendzo 'ŋa-do 'dzədi 'ze 'd_E
[3.単] しばしば [1.単]-ところ 手紙 書く [未完.B]
「あの人はしょっちゅう私に手紙をくれる」

3.2.3 主観的推測

発話源と関わり合いのない、第三者による行為であっても、それが発話源の主観的推測によって述べられる場合は A 系列の `q_Λ が用いられうる。発話源によらない行為についてであっても、主観的推測として述べられると A 系列が用いられるという点で、§ 3.1.1 の (15) の例と共通している (21-ii 参照)。

次の (27a) では、隣の部屋から聞こえてくる物音などを根拠に、子供たちがケンカをしていることを話し手の推測として述べている。このように、直接的な証拠がない状態では A 系列助動詞に推測の文末助詞を付加した形式が用いられうる。ケンカの様子を直接目にするなどして、事実として述べる場合は、(27b) のように B 系列の `q_ε のみが容認され、A 系列の `q_Λ は用いられない。

(27) a. ʔaŋʝə-re ʔnduŋdu=q_Λ=ba

子供-[複] 争う=[未完.A]=[推測]

「子供たちがケンカをしているようだ」(隣の部屋の物音を聞いて)

b. ʔaʝə=na ʔo-re ʔnduŋdu=q_ε/*q_Λ

[名]=と 友達-[複] 争う=[未完.B]/[未完.A]

「アギヨと友人たちがケンカをしている」(事実として)

この例は、§ 3.1.1 の (15) とは自分に直接関わりのある行為かどうかという点で異なっている。これは、前述した実現／非実現の差によるものと考えられる。

3.2.4 まとめ

以上のことから、継続中の意図的な行為について述べる文における `q_Λ/`q_ε の出現条件については、仮に、次のように言える。

(28) すでに実現して現在も継続している意図的な行為について、`q_Λ (A) / `q_ε (B) が用いられる場合：

- i. 進行中の行為の場に発話源が直接参与していれば、A が用いられる。

- ii. (i) に当てはまらない場合でも、発話源の主観的推測として述べる場合はAが
用いられる。……(27)
- iii. (i) と (ii) に当てはまらない場合は、Bが用いられる。
- iv. (i) に当てはまる場合でも、聞き手が主語となる陳述文では、Bを用いることが
好まれる (待遇表現)。……(24a)
- v. (i) に当てはまる場合でも、疑問に答える文では、Bが用いられうる。……(25)

§ 3.2.2 で観察した (24b) のように、非発話源が主語であっても発話源が参与していればAが用いられるという現象は、発話源が主語である場合と共に (i) によって説明される。ここで、発話源による直接の「認識」という表現を用いれば、A系列とB系列の違いは証拠性 (evidentiality) によるかのように見える。しかし、(iv, v) から、命題的内容や証拠性が同一であっても話し手の認識のあり方によって用いられる形式が異なるという、モダリティの特徴が見られることが分かる。また、次節で述べる非意図的な事態を表す場合との説明の一貫性を図るためには、単に述べられている内容を直接知っているかどうかという点を基準にすることはできない。

なお、非発話源による習慣的行為を述べる場合はBが用いられる (26)。これは、発話源の目の前で進行している事態とは異なり、(i) のように「行為の場に参与」しているわけではないためと説明できる。

3.3 過去の継続的な行為

未完了の助動詞 `qΛ`de は、過去の一定期間に継続的に行われた行為や事態を述べる際にも用いられることがある。この用例はあまり集められていないが、次のような例を観察することができた。²²⁾

22) この例 (29) は、チベット語についての研究である星 (1997: 203[8]) を参考にした作例である。星 (1997: 203[8]) においても、「他者について述べるのに用いられる」という基本的な機能を持つ -ki + `yoo `ree が話し手自身のことを述べるのに用いられている。
・チベット語 (星 1997: 203[8]; 下線は原文のまま、動詞語幹の後ろにハイフンを追加)
`nga `pöö la `täätüü, `nyintaa `ri-shi `paa `sa-ki `yoo `ree
私 チベット に 居た時 毎日 麦こがし 食べる
「私はチベットにいた頃、毎日麦こがしを食べていました」

(29) ʔa ʔnda ʔnqabi ʔdzu=da ʔariŋa ʔve ʔdzi=qe
 [1.単] 以前 [名] いる=に 毎日 麦こがし 食べる=[未完.B]

「私は昔ダバ地区にいた頃、いつも麦こがしを食べていました」

(cf.) ʔa ʔdzuu ʔzama ʔdzi=qA

[1.単] 今 食事 食べる=[未完.A]

「私は今、ごはんを食べています」

この例では、発話内で言及された過去の時（ダバ地区にいた頃）を基準の時点とし、その時点における習慣的な行為を助動詞 ʔqA/ʔqe によって表現していると考えられる。

(29) は話し手自身の意図的な行為を述べる文であるにも関わらず、B系列が用いられている。発話時における継続的な行為を述べる場合は、(cf.) に示したようにA系列が用いられる。ここで、過去のことが視野の範囲内でない、という説が考えられるかもしれないが、それだけでは説明不足である。§ 4.3 で見るように、過去の助動詞を用いて過去の出来事を述べる場合には、やはりA系列/B系列の区別があり、発話源の意図的な行為にはA系列の助動詞が用いられる。よって、「過去時制であればイベント実現の場が視野外のものとして扱われる」と言うことはできない。(29) においてA系列の ʔqA が用いられないのは、ʔqA が表す意味に制限があるためではないかと考えられる。前節までに見てきたように、ʔqA が用いられるのは、通常、(近い未来の出来事が決定済みであるという状況も含めて) 発話時において発話源の目の前にあるイベントや状況を述べる場合である。一方、(29) では、イベントは発話時においてすでに存在しない（過去における継続状態が発話時より前に終わっている）。つまり、ʔqA が用いられる一般的な状況に比べれば、相対的に発話源の視点から遠いと言える。この相対的な差異が ʔqA/ʔqe の選択に反映されていると考えられる。

非発話源による過去の継続的な行為を表す場合も、未完了の助動詞 ʔqe が用いられる。下に例を挙げる。この例においても、A系列の ʔqA は容認されない。発話源が会

星 (1997: 203) はこの例について、「遠い過去のことを物語を語るように述べる」例であるとし、このとき「話し手が叙述対象が他領域にあると捉えている」と説明している。

話の場を直接目撃したとしても、 $\acute{d}\epsilon$ が用いられる。

- (30) $\acute{j}\epsilon n\Lambda$ $\bar{s}w\iota n\epsilon=n\Lambda$ $\acute{a}j\theta=n\epsilon$ $\bar{n}j\iota nji=d\epsilon/*d\Lambda$
昨日 [名]=と [名]=2 話す=[未完.B]/[未完.A]
「昨日、スイネとアギヨの二人が話をしていた」

3.4 非意図的な事態を述べる場合

次に、非意図的かつ継続的な内容が $\acute{d}\Lambda/\acute{d}\epsilon$ によって表される例を観察する。以下では動態 (active) を表す述部と状態 (stative) を表す述部とに分けて述べる。

3.4.1 継続中の非意図的動態を表す場合

非意図的な行為について述べる場合は、B系列の $\acute{d}\epsilon$ を用いるのが無標である。(31)のように、話し手による行為であっても、別の誰かの行為であっても、非意図的、制御不可能なものであればB系列が用いられうる²³⁾。

- (31) a. $\acute{j}\alpha$ $\acute{n}p\upsilon g\epsilon$ $\acute{d}\epsilon/d\Lambda$
[1.単] 泣く [未完.B]/[未完.A]
「私は泣いている」
- b. $\bar{n}o$ $\acute{n}p\upsilon g\epsilon$ $\acute{d}\epsilon=mo$
[2.単] 泣く [未完.B]=[確認]
「あなたは泣いていますね」
- c. $\bar{n}oro$ $\acute{n}p\upsilon g\epsilon =d\epsilon$
[3.単] 泣く =[未完.B]
「あの人は泣いている」

これらの例はいずれも、「泣く」という行為が発生するに到ったプロセスには言及せ

23) (31a) で $\acute{d}\Lambda$ が用いられる例では、「わざと泣いている」という含意が生じている可能性がある。

ず、現在継続している「泣いている」という状況のみを事実として述べている。(28)の(i)に挙げた「行為の場」とは、非意図的な事態まで視野に入れた場合、事態実現に至るプロセスも含めた「イベント実現の場」と言い換えられる。

次の例(32)は、助動詞 $\acute{d}e$ によって、状態が変化する途上にあることを表す例である。ただし、話し手は変化のプロセスそのものを目撃しているわけではない。この例では、第三者の髪の状態について以前の状態と現在の状態を観察した上で、そこに自分の視野の範囲外にあるプロセスが存在していることを述べている。

- (32) $\acute{t}oro=ra$ $\acute{h}gatsi$ $\acute{a}be$ $\acute{a}-\acute{t}e$ $=\acute{d}e$
 [3.単]=の 頭髪 少し [方向]-白くなる =[未完.B]
 「彼の髪は少し白くなってきている(白くなりつつある)」

ここで、証拠性との相関について見ておく。(33a)は直接認識、(33b)は推量、(33c)は伝聞の例である。(33a, c)ではB系列が用いられるのに対し、話し手の推測を述べる(33b)ではA系列が用いられる。

- (33) a. $\acute{m}o?gu$ $\acute{a}-\acute{d}e$ $=\acute{d}e$
 雨 [方向]-降る =[未完.B]
 「雨が降っている」(屋外にいて、事実として) = (10a)
- b. $\acute{m}\acute{a}?gu$ $\acute{a}-\acute{d}e$ $=\acute{d}\acute{a}$ $=ba$
 雨 [方向]-降る =[未完.A] =[推量]
 「雨が降っているようだ」(屋内で雨音を聞くなどして) = (10b)
- c. $\acute{m}\acute{a}?gu$ $\acute{a}-\acute{d}e$ $\acute{d}e=\acute{d}e$
 雨 [方向]-降る [未完.B]=[伝聞]
 「雨が降っているそうだ」

「雨が降る」という事態は、人間の意図で左右することはできないため、これらの文は非意図的内容を述べるものであると言える。この場合、雨が降るに到るプロセスに

言及するのではなく、何らかのプロセスの結果としての「雨が降っている」という事態の継続を述べているのみである。事態が実現する場面が話し手の視野に入らないため、(28)の(i)は満たされず、通常はA系列が用いられる余地がない。(i)が満たされないにも関わらずA系列を用いれば、(28)の(ii)と同様、単に事実として述べるのではなく、発話源の主観に基づいて述べているという意味になる。

非意図的な事態を述べる場合についてまとめると、以下のようになる。この場合、イベントが実現される場面が発話源の認識の範囲内に存在することはない。

(34)すでに実現して現在も継続している非意図的な事態について、 $\acute{d}\alpha$ (A) / $d\epsilon$ (B) が用いられる場合：

- i. 発話源の主観的な推測として述べる場合、Aが用いられる。
- ii. (i)に当てはまらない場合は、Bが用いられる。

3.4.2 心理的状态を表す場合

同じ非意図的な内容でも、感覚や感情など心理的状态を述べる文では少し状況が異なる。

非発話源の感覚や感情で、現在も続いているものを表す場合は、次のように $d\epsilon$ が用いられるのが一般的である。(35)は、第三者の状態を述べる文である。

(35) a. $\bar{\eta}oro$ $\acute{m}a\bar{t}inba$ $\bar{h}d\Delta=d\epsilon$

[3.単] 非常に 悲しい=[未完.B]

「あの人はとても悲しんでいる」

b. $\acute{\eta}a=r\bar{o}$ $\acute{z}ant\bar{c}i$ $\bar{d}z\bar{u}u$ $\bar{h}k\bar{a}bala$ $\acute{\eta}i=d\epsilon$

[1.単]=の 娘 今 頭 病む=[未完.B]

「私の娘は今、頭が痛いようだ」

次の(36)は、聞き手の状態を述べる文である。(35)と同様に $d\epsilon$ が用いられていることから、聞き手が非発話源として第三者と同じ扱いを受けていることが分かる。

(36) ʔno ʔve ʔni=dε ʔmo

[2.単] 腹 病む=[未完.B] [確認]

「あなたはおなかが痛いんですね」

一方、話し手の感覚や感情を表す陳述文では、ʔε でも ʔd_A でもなく、状態を表す文末助詞 re または接尾辞 -ε が用いられる²⁴⁾。(37a, b) は re が、(37c) は -ε が用いられる例である。

(37) a. ʔja ʔsanba=wu ʔhd_A=re

[1.単] 気持ち=に 悲しい=[状態]

「私は悲しい」

b. ʔja ʔdzuu ʔhkabala ʔni=re

[1.単] 今 頭 病む=[状態]

「私は今、頭が痛い」

c. ʔnje ʔndabi-re ʔtε

[1.複] ダパ人-[複] 喜ぶ.[-ε]

「私たちダパ人は喜んでいきます (うれしい)」 (ʔ_A 「喜ぶ (語幹)」)

次の (38) に見るように、非発話源の状態に関する発話源の主観的観測を述べる際には A 系列助動詞 ʔd_A (d_i) が用いられる。上の (36), (37b) と対照すると、非発話源に関する

24) これらの例で発話源の内面の事態を述べる際に用いられる re は、助動詞ではなく文末助詞の一種である。形容詞述語文にも用いられ、継続的な状態を表す機能を持っている。次のように、発話源が知覚した客観的な状態を述べるのに用いられる。つまり、(37) で発話源自身のことを述べるのに用いられているからといって、A 系列の機能と並行的というわけではない。

a. ʔgonlu =re

暑い =[状態]

「(気温が) 暑い」

b. ʔjoro=ra ʔnazo ʔtswitsu=i =re

[3.単]=の 妻 太っている=[小辞] =[状態]

「彼の奥さんは太っている」

る陳述・発話源に関する陳述のどちらとも異なる形式が用いられていることが分かる。

- (38) ʔno ʔve ʔni=dʔi ʔba
[2.単] 腹 病む=[未完.A] [推測]
「あなたはおなかが痛いんでしょう」

非発話源の状態について尋ねる疑問文に、A系列助動詞が用いられる場合がある。これは、(38)に対応し、発話源の主観的判断を尋ねる疑問文であると考えられる²⁵⁾。

- (39) ʔngɛngɛ ʔdzuu ʔtseri=da ʔɕeʔdzu ʔdʌ=mɛ
先生 今 [名]=に 腹を立てる [未完.A.強調]=[疑問]
「先生は今、ツェリに腹を立てていますか？」

- (cf-1) ʔngɛngɛ ʔdzuu ʔtseri=da ʔɕeʔdzu =dɛ
先生 今 [名]=に 腹を立てる =[未完.B]
「先生は今、ツェリに腹を立てている」

- (cf-2) ʔŋa ʔdzuu ʔtseri=da ʔɕeʔdzu =re/*=dɛ
[1.単] 今 [名]=に 腹を立てる =[状態]/[未完.B]
「私は今、ツェリに腹を立てている」

非意図的に生起する事態を述べる際、主観的観測にA系列助動詞が用いられるという点は、§ 3.4.1での観察と一致する。ただし、発話源自身の状態を表すreがある点が異なっている。非意図的内容の述部にʔdʌ/dɛが用いられる場合に関しては、(34)を修正して、次のようにまとめられる。

- (40) すでに実現して現在も継続している非意図的な事態について、ʔdʌ (A) /dɛ (B) が用いられる場合：

25) あるいは、疑問文の形式をとってはいても、実際には話し手の主観的憶測を述べているという可能性もある。

- i. 発話源の状態を述べる場合は、どちらも用いられない。
- ii. (i) 以外の内容について発話源の主観的な推測として述べる場合、Aが用いられる。
- iii. (i, ii) に当てはまらない場合は、Bが用いられる。

3.5 考察

未完了の助動詞 'dɔ (A) / 'dɛ (B) の使い分けについて、一貫した説明を目指し、時制・アスペクト・意図性によって用法を分類して観察してきた。その中で、A系列助動詞が用いられるための主要な条件として、(1) イベント実現の場への発話源の参与、(2) 発話源の主観的な推測、という2つを示した。これらの条件付けの基盤には発話源／非発話源の区別がある。本節では、ここまでに見てきたA系列とB系列の特徴を一貫して区別しうる基準として、「視点の有無」を導入し、ダパ語の未完了助動詞への適用を試みる。

3.5.1 発話源の視点の有無

「視点」の概念は、参加者の人称と一定の相関関係がありながら、一致とは異なり「事態がどのように認識されるか」に関わる現象を説明する際に、有効である。「視点」は、久野 (1978) などに見るように、日本語の研究において重要視されてきた。

視点は文中の参加者のいずれかに近づけられうる。久野 (1978: 110, 140-146)²⁶⁾ にも述べられているように、一般に、最も視点が置かれやすい、言い換えれば共感度が最も高いのは、話し手と一致する、1人称である。ところが疑問文については、「聞き手の視点を訊ねる文」(久野 1978: 111) と分析される例があるように、質問を受けている人物すなわち聞き手に視点を近づけることが一般的である。視点の近づけやすさという点で、陳述文における話し手と、疑問文における聞き手が共通の特徴を持つということが言える。これは、ダパ語で見てきた発話源／非発話源の区別と一致する²⁷⁾。視

26) 「話し言葉において話者の視点がYのそれと完全に一致するのは、「Y = 話者」の場合のみであろう」(久野 1978: 110)

27) 伝達文の情報源についても同様のことが言える。

点の表示が体系的に行われる言語では、発話源が文中に参加している限り、発話源に視点を近づける表現が行われることが予測される。

また、日本語において、視点に関わる人称制限が断定形の文のみに見られ、話し手の推測を述べる文などでは制限がなくなることが、益岡 (1997: 2-7) などにおいて指摘されている。この特徴は、ダバ語において話し手の主観的推測を述べる文では人称に関係なくA系列助動詞が用いられるという現象と共通している。

以上の共通点をふまえて、本稿では、ダバ語のA系列とB系列の述部の使い分けにおいて、「視点」のあり方が大きな役割を果たすと考える。A系列が用いられる文では、発話源に視点が近づけられている。それに対し、B系列が用いられる文は、久野 (1978: 130) の言う「遠射²⁸⁾」に相当すると言えるだろう。視点が発話内容中のどの参与者にも接近することのない表現である。ただし、ダバ語の助動詞の選択において問題となるのは、どの参与者に視点が接近するか、ではなく、発話源 (locutor) の視点が表明されるか、隠されて「遠射」として述べられるか、という、いわば「近射」か「遠射」かの違いではないかと考えられる。つまり、「近射」の文は無標のA系列の述部を持ち、「遠射」で客観的事実として述べられる文はB系列の述部を持つ。

第2.1節で述べたように、形態論上、B系列助動詞は助動詞語幹に離接標識が付加されることで形成されている。離接標識の機能は「遠射」の標示であると言える。

本稿で用いる「視点」という概念は、モダリティ研究で用いられる視点の概念を援用し、ダバ語に合わせて一部改変したものである。本稿では次のように「視点」および「視野」という概念を用いる。Curnow (1997) の言う発話源 (locutor) が、一般に視点の中心となる人物である。述べられる事態が、その人物の視野の及ぶ範囲内、すなわち「視野」内にあるかどうかについての話し手の判断が、述部形式の選択における最も基本的な基準となる。ここに、聞き手に対する話し手の配慮が、もう一つの基準として加わることがある。発話源の視野の範囲内で成立し、かつ、非発話源に配慮する必要のない内容を述べる際は、「視点あり」の形式が用いられる。これに当てはまらない場合は、「視点なし」の形式が用いられる²⁹⁾。「視点あり」は上述の「近射」に相

28) 「遠射」は、文中のいずれの名詞句の指示対象に対しても共感度の値がゼロであるという発話態度である。久野 (1978: 130, 134) 参照。

当し、発話源の視点が含まれる文である。「視点なし」は「遠射」に相当し、視点が発話内容中のどの参与者にも、発話内容そのものにも、近づけられない文である。

3.5.2 まとめ：未完了助動詞の使い分けと視点

視点の有無という概念を用いると、 $\text{'d}_A/\text{d}_E$ が用いられる条件は、以下のようにまとめられる。視点の中心は常に発話源である。

(41) $\text{'d}_A(A)/\text{d}_E(B)$ が用いられる条件：

Aは視点ありの文、Bは視点なしの文に用いられる。

- i. イベントが実現される場面に発話源の視点が置かれ、かつ、他者の視野が優先されない場合は、視点あり。
- ii. 聞き手が主語となる陳述文では、視点なしの表現が好まれる（待遇表現）。
- iii. イベントが実現される場面がどの発話参与者の視野の範囲内にも存在しない場合、主観的推測として発話源の視点を強調して述べるなら、視点あり。
- iii. (i) と (ii) に当てはまらない場合は、視点なし（遠射）。
- iii. 疑問文では視点ありの表現が好まれる（待遇表現）。

この条件付けでは、意図的な事態も非意図的な事態も一貫して説明することが可能である。

発話源の視点が表示される最も典型的な例は、発話源が引き起こした意図的行為を述べる文である。すでに実現している (realis) 行為を述べる文においては、行為者は自動的に (i) の「イベントが実現される場面」に居合わせる。発話源が行為者であれば、ほぼ義務的に視点が置かれる。また、発話源が行為者でなくても、文中に参加していれば、一般に、イベント実現の場に居合わせることが可能である。このため、発話源

29) 言語形式の定義に当たって「聞き手の領域 (hearer's domain)」ないしはその相当物を認めるべきかどうかについては議論がある (田窪・金水 1996, Takubo and Kinsui 1997: 749, 757)。ここで仮に「聞き手の視点 (知識/領域) に話し手が配慮する」ことが待遇表現につながると説明するなら、Kamio (1995) などの言う「情報のなわ張り」理論に通じる。本稿では、この問題には立ち入らず、待遇表現を語用論の領域にあるものとして処理する。

が参与する、実現済みの意図的行為を述べる文は、視点ありの文となり、Aが用いられる。

未実現の事態を述べる場合は、何を「イベントが実現される場面」とするかが問題となる。未完了の助動詞 'qA/dε が未実現の事態に用いられるのは、何者かによって決定され、実現されることがほぼ確実な、近未来の意図的行為を述べる場合に限られる。この場合、意志決定に参与することが、イベント実現の場を視野に入れること条件であると考えられる。例えば (17b), (18b) のように、話し手が意志決定に参加している場合、発話源が文中に参与していなくても A が用いられうる (以下に再掲する)。

(42) a. 'ami 'ŋa=rə 'zəntçi 1ε `mə=qA = (17b)

夕方 [1.単]=の 娘 包子 作る =[未完.A]

「今晚、私の娘は包子を作ります」(娘が包子を作ることを自分が決めた)

b. 'somuŋi 'ŋa=rə 'bənʒə ɱŋeŋɣe-ɬo 'ji 'ji=qA = (18b)

明日 [1.単]=の 子供 先生-ところ 手伝う 行く =[未完.A]

「明日、うちの子は先生のお宅に手伝いに行きます」(家族の決定事項として)

'qA/dε を用いて非意図的な内容を述べる文においては、イベント実現後の結果状態が問題となり、イベント実現のプロセスは視野の範囲外に置かれる。このため、一般にはBが用いられる。Aが用いられるとすれば、それは、イベント実現の場が視野の範囲内にあるかのように述べる、派生的な用法であると言える。(ii)の「主観的推測として発話源の視点を強調して述べる」場合がこれに当たる。実際にはイベント実現の場は視野から外れた位置にあるが、あえて話し手自身の視点からものを認識していることを表明することによって、主観的な推測を述べていると解釈されることが考えられる。本稿では、このように派生的な意味を表すために視点表現が「利用」されている文に関しても、視点ありの文として扱うことにする。

なお、'qA/dε と推量の文末助詞を ba を組み合わせて話し手の推量を述べる場合、現在の事態についてはA系列が、未来の事態についてはB系列が用いられるという、強い傾向がある。本稿ではこれを視点の置かれ方から説明することを試みたが、時制

との相関がかなりの程度慣用化している可能性もある。

また、ダバ語においては、聞き手の視野への配慮も重要な役割を担うと考えられる。

イベント実現の場が聞き手にとっても視野の範囲内にある場合は、待遇表現として、話し手の視点を置かない形式つまりB系列の述部形式が選択されることがある。話し手が行為者であれば、人称の制限が優先され、A系列が用いられる。しかしそれ以外の場合は、話し手の視点を置かないB系列の形式が好まれる。

疑問文においては、視点の中心人物は聞き手に移る。話し手は、陳述文以上に発話源 (= 聞き手) の視点を尊重して述部形式を選択する。そのため、陳述文と疑問文における発話源 (locutor) とA系列助動詞の結びつきは完全に対称的ではなく、疑問文の方が視点ありの形式 (A) が選択されることが多くなる。

4 助動詞体系

前節で述べた、二系列の助動詞の機能に関する考察を元に、未完了以外の助動詞の記述と分析をおこなう。個別の問題を解決した上で、ダバ語の助動詞体系を整理する。

4.1 完了の助動詞 wu/wua

行為の完了や変化の終了を表す際には、助動詞 `wu/wua が用いられる³⁰⁾。黄 (1990b: 78) の記述するダト方言で対応する形式は、“完成体”の -wu⁵⁵/-wa⁵⁵ である。

第3節と同様に、まず意図的行為を述べる文について詳しく観察し (§ 4.1.1 ~ §

30) 助動詞 `wu/wua は、動詞 `wu 「終わる」と関係があるかもしれない。

`zje `xe `wu `tja
夏 もう 終わる しそうだ
「夏はもうすぐ終わる」

助動詞 `wu/wua は、過去における完了にのみ用いられる。未来における完了を表す文では、動詞 `wu 「終わる」を含む動詞連続が用いられる。

a. `no `somuni `ci `A-ve `wu=me
[2.単] 明日 畑 [方向]-耕す 終わる=[疑問]
「あなたは明日、畑を耕し終わりますか？」

b. * `no `somuni `ci `A-ve `wu=me
[2.単] 明日 畑 [方向]-耕す [完了.A]=[疑問]

4.1.5)、非意図的事態を述べる文についても説明する (§ 4.1.6)。

4.1.1 発話源の参与する行為の文

意図的行為を述べる文に発話源が参与していれば、発話源が主語であっても目的語であっても `wu が用いられる。

まず、次に示すとおり、話し手による行為についての陳述文では、`wu のみが用いられる³¹⁾。

- (43) a. ʔa ʔanta ʔno=rə ʔbaŋθ =nɛŋji ʔa-ɕje ʔwu/*wua
 [1.単] さっき [2.単]=の 子供 =に向かって [方向]-話す [完了.A]/[完了.B]
 「私はさっきあなたの子供に話してしまった」
- b. ʔa ʔno=wu ʔdzudzuru ʔtanda ʔde=ji ʔa-ɕje ʔwu/*wua =mo
 [1.単] [2.単]=に たった今 事 1=[類別] [方向]-話す [完了.A]/[完了.B] =[確認]
 「私はたった今あなたに事情を話してしまいましたよね」

話し手に向けられた行為を述べる文でも、`wua は容認されにくく、`wu を用いるのが自然である。すでに終了したイベントについて述べる場合は、未完了のイベントについて述べる場合よりも A 系列が用いられやすいという傾向が見て取れる。

- (44) a. ʔqaci ʔanta ʔa ʔnenji ʔa-ɕje ʔwu/*wua
 [名] さっき 私 に向かって [方向]-言う [完了.A]/[完了.B]
 「タシはさっき私に話し終えた」

31) 次の例では、一見すると `wua が用いられているように見える。しかし実際は、`wu に時制を遠ざける文末表現 -are が付加された形式であり (白井 2006a: 157-159)、反例とはならない。-are は離接標識 -a を含み、過去または未来の事態について視点なしで述べる場合に用いられる形式である。

ʔa ʔanta ʔa-ɕje ʔwu-are
 [1.単] さっき [方向]-言う [完了]-[遠時]
 「私はさっき話してしまった」

b. ˈno ˈanta ˈŋa ˈnenji ˈa-ɕɛ ˈwu/*ˈwua =mo
 [2.単] さっき [1.単] に向かって [方向]-言う [完了.A]/[完了.B] =[確認]
 「あなたはさっき私に話してくれましたよね (もう言う必要はない)」

(44) は話し手に向けられた行為を述べるもので、A系列の `wu のみが容認される。(44b) のように聞き手が主語であっても `wu が用いられる点が、§ 3.2.2 の (24a) とは異なっている。

(45) ˈno ˈdzuu ˈŋa=wu ˈga-ji =ɕɛ/*ɕa =mo = (24a)
 [2.単] 今 [1.単]=を [方向]手伝う [未完.B]/[未完.A] =[確認]
 「あなたは今、私を手伝ってくれていますね」

§ 3.2.2 では、聞き手が主語である場合には話し手が直接参与していても A 系列未完了助動詞が用いられにくいという現象について、待遇表現の一種であると分析した。ここで、待遇表現の制限が常に適用されると考えると、(44b) に示される事実に合わない。この問題について、「視野」の観点から説明を試みる。

本稿で扱うダパ語の待遇表現は、聞き手の視野に配慮するというものである。(45) で表されるような未完了の事態については、イベント実現の場面が発話時点において聞き手の目の前にあるか、もしくはこれから目にする可能性がある。つまり、聞き手の視野に入る可能性がある。そのため、聞き手の視点に配慮する必要性が強くなるのではないかと考えられる。一方、`wu/wua は、過去においてすでに完了した事態を表す助動詞である。そのため、イベント実現の場面はすでに存在しない。聞き手が直接参与したものであってもそれを聞き手が覚えているかどうかの保証はない。また、発話時点以後に再び聞き手がそれを直接経験する可能性もない。よって、話し手が聞き手の視点に配慮する必要は小さくなる。そのため、非過去の事態を述べる陳述文では話し手の視点をぼかすという待遇表現が用いられやすいのに対し、過去の事態ではそのような表現が少なくなるものと考えられる³²⁾。

32) (44b) は、「もう言う必要はありませんよ」という含意のある文脈で言われたものであるため、

4.1.2 発話源の参与しない文

次の(46)のように聞き手による行為を述べる文では、B系列の`wuaを用いるのが自然である。文脈を強く指定しない限り (§ 4.1.3)、A系列の`wuの容認度は低い。

- (46) `no `dzuu `ngeŋge `nenji `a-ɕje `wua/?wu =mo
 [2.単] 今 先生[強調] に向かって [方向]-言う [完了.B]/[完了.A] =[確認]
 「あなたは今、先生に話してしまいましたね」

次のように、第三者同士の間で行われた行為について述べる際は、`wu/wuaともに用いられうる。

- (47) a. `loʔda `bɔŋɕ-ɾe `tanda `ngeŋge `nenji `a-ɕje `wua
 学生-[複] 事 先生[強調] に向かって [方向]-言う [完了.B]
 「学生たちは先生に事情を話し終えた」
- b. `loʔda `bɔŋɕ-ɾe `tanda `ngeŋge `nenji `a-ɕje `wu
 学生-[複] 事 先生[強調] に向かって [方向]-言う [完了.A]
 「学生たちは先生に事情を話し終えた」(話し手はその場に居合わせた)

協力者によれば、「自分が直接見た」「聞き手がよく知らない」内容については、`wuが用いられるという。話し手がイベントの場に居合わせた場合、`wuを用いた(47b)は問題なく容認される。また、次のように、話し手が居合わせたことが明らかな文においては、`wuが用いられるのが自然である。

- (48) `ŋonne `ŋa-ɖo `zama `ga-ʔdzi `wu = (7b)
 [3.双] [1.単]-ところ 食べ物 [方向]-食べる [完了.A]
 「その2人は私のところでご飯を食べた」(話し手が食事を用意した)

後述の(49)と同様、自分が熟知していることを強調する文になっている可能性もある。

(47b) や (48) のように、発話源が参与しない文でも A 系列が全く問題なく容認されうるといふ点は、第 3 節で観察した未完了の助動詞とは異なっている。これは、前節で考察したように、すでに存在しない事態について述べる場合の方が、未完了の事態についてよりも、非発話源の視野に考慮する必要が少ないことと関係していると考えられる。つまり、イベント実現の場が聞き手の視野に入る可能性がないことから、話し手の視野が優先されうると説明づけられる。(46) では、逆に、聞き手の視点が存在しうる状況であるため、配慮の必要性が相対的に高く、自分の視点を優先する表現は避けられると考えられる。前節 (45) に再掲した § 3.2.2 (24a) と同様、一種の待遇表現として説明することができる。

4.1.3 2人称主語と A 系列助動詞の共起

聞き手の行為について述べる文においても、`wu が用いられる場合がある。次のような例である。

(49) a. (自分が言ったことを覚えていない人に対して)

`no `ngɛngɛ `nɛnɟi `a-ɟɛ `wu =mo
 [2.単] 先生[強調] に向かって [方向]-言う [完了.A] =[確認]
 「あなたは先生に話してしまったでしょ」 cf. (46)

b. (食事の後すぐにまたお菓子を食べている子供に対して)

`no `zama `gi-ʔdzi `wu `mo, `xɛ `ga-ʔdzu
 [2.単] 食べ物 [方向]-食べる [完了.A] [確認] もはや [方向.禁止]-食べる.[命令]
 「あなたはもうご飯を食べましたよ、もう食べてはいけません」 = (7c)

(49a) は、聞き手がある事情を先生に話したかどうかよく覚えていないが、話し手は聞き手がその話をした場を目撃してよく知っている、という文脈においては容認される。(46) に示したように、このような文脈がなければ容認されにくい。(49b) では、聞き手である子供が食事を終えていることを話し手がよく知っているということ、`wu

を用いることにより含意している。

これらはいずれも、聞き手の視点を考慮することなく、話し手自身の視点を強調して述べられた文であるといえる。§ 3.5 で述べたように、聞き手にとって視野の範囲内にある事態を述べる際は、話し手の視点を排除するという現象が見られる。しかし(49a)の文脈においては、「話したかどうかを聞き手が覚えていない」ことが話し手と聞き手の共通認識となっている。このように、ある人物が真偽を知らない場合、その事態はその人物の視野の範囲内に存在していない。この例は聞き手の視野の範囲内にはない事態を述べる文であるため、主語が第三者である場合と同じ扱いを受ける。すなわち、話し手がイベント実現の場に居合わせた内容であれば、(47b)と同様に `wu が用いられるのが自然であるということになる。

このことは、1人称を主語とする疑問文³³⁾の返答の中で、2人称主語と共に `wu が用いられることから確認できる。以下は、「一人一つずつもらえる物を自分が既にもらったかどうか覚えていない人が、その場にいる人に尋ねる」という文脈を想定した例である。

- (50) A: ̄ŋa ̄ntɕala =kɛɾɒ ̄tɕu ̄wu=me ̄mɛ-wu ̄vɛ
[1.単] 物 =[類別] 持ち去る [完了.A]=[疑問] [否定]-[完了.A] [疑問.1]
「私は物を一つもらいましたっけ？」
- B: ̄no ̄tɕu ̄wu ̄mo
[1.単] 持ち去る [完了.A] [確認]
「あなたは持って行きましたよ」

(49b) では、話し手は「既にご飯を食べた (ゆえにおやつを食べるべきではない)」という事態を聞き手が正しく認識していないことを想定している。一方、話し手自身は聞き手が食事をした場に居合わせ、その事態を熟知している。このように認識の程度に格差があり、話し手の認識の程度が聞き手のものよりも優れているという想定

33) 1人称が主語となる疑問文では、文末に `vɛ が付加されるのが一般的である。`vɛ は文末助詞の一種と考えられる。

もとで述べる場合、聞き手の視点は無視される。

4.1.4 疑問文

2人称が主語となる疑問文では、`wu のみが用いられる。疑問文における聞き手が発話源として扱われることが確認できる。

- (51) a. ˈno ˈngɛngɛ ˈnɛnʃi ˈa-ɔjɛ ˈwu/*wua =me
[2.単] 先生[強調] に向かって [方向]-言う [完了.A]/[完了.B] [疑問]
「あなたは先生に話してしまいましたか」
- b. ˈno ˈdzɔdi ˈde=pjɛ=rɔ ˈa-lo ˈwu=me
[2.単] 本 1=[類別]=の [方向]-読む [完了.A]=[疑問]
「あなたは本を一冊読み終わりましたか？」

主語が1人称の疑問文では、(52)のように`wu が用いられる。これらの例は、自分が記憶していない事態について相手の認識を問うという文脈を想定したものである。疑問文においては視点を聞き手に移すのが無標となる。そのため、1人称と3人称に関わる内容については視野の範囲外の事態として`wua が用いられることが想定される³⁴⁾。しかし、1人称が主語となる疑問文は話し手自身のことについて尋ねるという特殊な事態が前提となることから、聞き手がイベント実現時を目撃していたことを想定して発話されるのではないかと考えられる。そのため、聞き手すなわち疑問文における「発話源」の視点を優先し、`wu が用いられると考えられる。

- (52) a. ˈŋa ˈzama ˈgi-ʔdzi ˈwu=me ˈmɛ-wu ˈvɛ
[1.単] 食べ物 [方向]-食べる [完了.A]=[疑問] [否定]-[完了.A] [疑問.1]
「私はごはんを食べましたか？」

34) 接合／離接の範疇を持つ他の言語においては、一般に、1人称主語疑問文では3人称と同じ形式が用いられる(白井 2006a: 218-227)。

b. ʔje ˈgoro ʔdzədi=pje=rə ˈa-lo ˈwu=me ˈve

[1.複] この 本=[類別]=の [方向]-読む [完了.A]=[疑問] [疑問.1]

「私たちはこの本を読み終わりましたっけ？」

疑問文の主語が3人称である場合には、(53a)のように`wua が用いられるのがより一般的である。しかし、(53b)のように`wu を用いても問題ないという。これも、聞き手の視点が優先される表現と考えられる。

(53) a. ʔoro ʔdzədi ʔde=pje=rə ˈa-lo ˈwua=me

[3.単] 本 1=[類別]=の [方向]-読む [完了.B]=[疑問]

「彼は本を一冊読み終わりましたか？」

b. ʔoro ʔdzədi ʔde=pje=rə ˈa-lo ˈwu=mi

[3.単] 本 1=[類別]=の [方向]-読む [完了.A]=[疑問]

「彼は本を一冊読み終わりましたか？」

4.1.5 伝達文

伝達文中においては、元の話し手が発話源として扱われる。

次のように、本来の話し手と伝達文中の主語が一致している場合には、A系列の`wu が用いられる。

(54) ˈrentʃe ˈtu ʔdzədi =wu ˈga-ntʃi ˈwu ˈde

[名] [伝聞主語] 本 =を [方向]-見る [完了.A] [伝聞]

「(レンチェ本人が言うには、) レンチェは本を読み終わったそうだ」

一方、本来の話し手と伝達文中の主語が一致しない場合は、`wu/wua のいずれも用いられうる。これは、(47)のような第三者の行為について述べる陳述文と並行的で、本来の話し手（お父さん）がイベント実現の場に居合わせたかどうかによって使い分けられている。

(55) a. ʼaŋʂa ʼɕjɛ=rɛ, ʼnguʔtɕi-rɛ ʼhkatɕa ʼa-ɕjɛ ʼwua ʼde
 お父さん 言う=[状態] 指導者-[複] 話 [方向]-言う [完了.B] [伝聞]

「お父さんが言うには、指導者たちの話は終わったそうだ」

b. ʼaŋʂa ʼɕjɛ=rɛ, ʼnguʔtɕi-rɛ ʼhkatɕa ʼa-ɕjɛ ʼwu ʼde
 お父さん 言う=[状態] 指導者-[複] 話 [方向]-言う [完了.A] [伝聞]

「お父さんが言うには、指導者たちの話は終わったそうだ」(お父さんは話を最後まで聞いた)

4.1.6 非意図的な事態を述べる場合

非意図的ないし制御不可能なイベントが発生し、すでに終了しているというような場合にも、ʼwu/ʼwua が用いられうる。

(56) a. ʼŋa ʼŋoro =berə ʼdo-hmo ʼwua
 [1.単.強調] [3.単] に関して [方向]-忘れる [完了.B]

「私は彼のことを忘れてしまった」

b. ʼŋa=rə ʼzəntɕi ʼŋa =berə ʼdo-hmo ʼwua
 [1.単]=の 娘 [1.単.強調] =に関して [方向]-忘れる [完了.B]

「私の娘はもう私のことは忘れてしまった」

c. ʼno ʼhɕəma =berə ʼdo-hmo ʼwua ʼmo
 [2.単] [名] =に関して [方向]-忘れる [完了.B] [確認]

「あなたはドマのことを忘れてしまったんですね」

上の (56a,b) のように、事態に発話源が直接参与している文においても B 系列が用いられうる。これは、§ 3.4 で見たのと同様、発話源がいくら事態に関わっていても、事態が実現される場面が視野の範囲内にないためであると考えられる。(56a) のように主語が 1 人称であっても、自分が何かを「忘れる」過程を直接知ることはありえない。

なお、(56a) とほぼ同じ内容を、次のように ʼwu を用いて述べることも可能である。

(57) ʔa ʔoro =berə ʔo-ɲmo ʔu

[1.単.強調] [3.単] =関して [方向]-忘れる [完了.A]

「私は彼のことを忘れたようだ（／忘れることにした／忘れたことにする）」

単に「忘れたようだ」という意味で (57) が述べられる場合は、主観的推測を表していると考えられる。つまり、自分が「忘れていいる」ことを観察する際は、かつては「彼」を知っていたかのような間接的な証拠があり、現在は「彼」に覚えが無いという客観的な事実があることから、「自分が彼を忘れる」というイベントが発生したらしい、ということ推測することになる。そのイベントは明らかに他者にとっても視野の範囲外で発生することであるから、(33b) などと同様、主観的推測として視点ありの形式で述べられる可能性がある。

協力者によれば、(57) の文は「意図的に忘れた／忘れることにした」という含意があるようにも聞こえるという。視点ありの形式である ʔu を用いることにより、「忘れる」というイベントの実現する時点を話し手の意志内に置いたという含意が生じると考えられる。

制御不可能な事態に関する疑問文では、聞き手が主語であっても B系列の ʔua が用いられる。§ 4.1.4 で見たように、疑問文では陳述文よりも A系列が現れやすい。このことから、制御不可能な事態を述べる文では A系列助動詞がかなり用いられにくいことが分かる。

(58) ʔo ɲoma =berə ʔo-ɲmo ʔua ɲe

[2.単] [名] =関して [方向]-忘れる [完了.B] [疑問]

「あなたはドマのことを忘れてしまったんですか？」

4.1.7 まとめ

以上の考察から、ʔu と ʔua の現れ方は、前節で見た、すでに実現している事態についての ʔa/ʔe の場合と並行的であることが分かる。その条件は、(41) と全く同様に

なる。ここで、(41)の条件が、どの助動詞についてもA系列/B系列の現れを一貫して説明しようと仮定して、以下のように一般化しておく。

(59) Aは視点ありの文、Bは視点なしの文に用いられる。

- i. イベントが実現される場面に発話源の視点が置かれ、かつ、他者の視野が優先されない場合は、視点あり。
- ii. 聞き手が主語となる陳述文では、視点なしの表現が好まれる（待遇表現）。
- iii. イベントが実現される場面がどの発話参加者の視野の範囲内にも存在しない場合、発話源の視点を強調して述べるなら、視点あり。
- iii. (i)と(ii)に当てはまらない場合は、視点なし。
- iii'. 疑問文では視点ありの表現が好まれる（待遇表現）。

4.2 経験の助動詞 $n\Lambda/na$

$\backslash n\Lambda/na$ という一对の助動詞は、かつて経験したことがある内容を述べるのに用いられる。ダト方言(黄 1990b: 78)の $n\Lambda^{55}/na^{55}$ に対応する。A/Bの使い分けについては、完了の助動詞とほぼ並行的である³⁵⁾。

4.2.1 意図的行為を述べる陳述文

発話源自身の意図的な行為を述べる文では、A系列の $\backslash n\Lambda$ が用いられ、B系列の $\backslash na$ は容認されない。

- (60) $\backslash \eta a$ $\backslash tseri\text{-}d\phi$ $\backslash dz\Lambda di$ $\backslash d\Lambda\text{-}ht\epsilon u$ $\backslash n\Lambda/^*na$
 [1.単] [名]-ところ 手紙 [方向]-送る [経験.A]/[経験.B]

35) 完了の助動詞に現在から遠い時制を表す $-are$ が付加された形式もしばしば用いられる。これは § 4.1 の注 (33) で言及した文末表現と同じものである。この形式には離接標識が含まれるが、本稿では問題にしない。

$\backslash no$ $\backslash \eta o=r\Lambda$ $\backslash abe$ $=n\Lambda$ $\backslash go\text{-}hdu$ $\backslash na\text{-}a're=me$
 [2.単] 自分=の 祖父 =と [方向]-会う [経験]-[遠時]=[疑問]
 「あなたは自分のおじいさんに会ったことがありますか？」

「私はツェリに手紙を出したことがある」

聞き手の意図的行為について述べる際は、それが話し手に直接関与した内容でなければ、B系列の`naが用いられる。

- (61) `no `daçi=nΛ `go-hdu `na `mo
[2.単] [名]=と [方向]-会う [経験.B] [確認]
「あなたはタシに会ったことがありますね」

2人称が主語となる文でも、話し手の視点を置いて述べることもありうる。例えば(62)は、「私はいくつのお寺にお参りしたことがあるか」という子供の問いに対して親が答えるという文脈を想定した例である。(62a)のように`nΛを用いるのは、すべてのお寺について話し手が連れて行ったなど、その事態の成立に話し手が直接かつ意志的に参与していた場合に限られる。単に客観的事実として述べる場合は、(62b)のように`naが用いられる。

- (62) a. `no `hgenbe `hdΛ=ji `gə-ndzje `nΛ
[2.単] 寺 4=[類別] [方向]-参拝する [経験.A]
「あなたは4つのお寺にお参りしたことがあります」(すべて話し手が連れて行った)
- b. `no `hgenbe `hdΛ=ji `gə-ndzje `na
[2.単] 寺 4=[類別] [方向]-参拝する [経験.B]
「あなたは4つのお寺にお参りしたことがあります」

第三者の行為について述べる場合は、`nΛ/naのいずれも用いられる可能性がある。ただし、(63a)のように第三者と聞き手の間で行われた行為について`nΛを用いることはほぼ容認されない。常時「社長」の身辺にいてその動向を極めてよく知っている人物、例えば社長秘書のような人物の発話としてなら、(63b)のように`nΛを用いること

がありうる。この場合、社長と聞き手の間の手紙のやりとりについて、話し手が聞き手以上によく把握しているという含意が生じる。(63c)については、誰もが知りうる客観的事実として述べる場合は `na が用いられるが、自分が特によく知っている事情として述べるなら `nA が用いられうる。

- (63) a. ʔsonba ʔno-dɔ ʔdzɔdi ʔdɔ-htɕu ʔmɛ-na/ʔʔnA
 社長 [2.単]-ところ 手紙 [方向]-送る [否定]-[経験.B] / [経験.A]
 「社長があなたに手紙を出したことはない」
- b. ʔsonba ʔno-dɔ ʔdzɔdi ʔdɔ-htɕu ʔmɛ-na
 社長 [2.単]-ところ 手紙 [方向]-送る [否定]-[経験.A]
 「社長があなたに手紙を出したことはない」(話し手=社長秘書)
- c. ʔqaci ʔtseri-dɔ ʔdzɔdi ʔdɔ-htɕu ʔna / ʔnA
 [名] [名]-ところ 手紙 [方向]-送る [経験.B] / [経験.A]
 「タシはツェリに手紙を出したことがある」

話し手が直接関与した内容であれば、`nA が用いられるのが普通である。

- (64) a. ʔno ʔŋa=nA ʔgo-hdu ʔnA ʔmo
 [2.単] [1.単]=と [方向]-会う [経験.A] [確認]
 「あなたは私に会ったことがありますね」
- b. ʔsonba ʔŋa-dɔ ʔdzɔdi ʔdɔ-htɕu ʔmɛ-na/*na
 社長 [1.単]-ところ 手紙 [方向]-送る [否定]-[経験.A] / [経験.B]
 「社長が私に手紙を出してくれたことはない」
- c. ʔŋa-dɔ ʔrentɕe ʔdzɔdi ʔdɔ-htɕu ʔnA
 [1.単]-ところ [名] 手紙 [方向]-送る [経験.A]
 「私にはレンチェが手紙をくれたことがある」

話し手の主観的推測を述べる場合に、`nA が用いられうる。(65)は、「彼」が話して

いる内容が信憑性に欠けることに話し手が気付いた、という文脈を設定した例である。

- (65) ṅoro ṽlasa=rə ˈdɔnda ˈtɕiŋga ˈɕje=dɛ =anɒ,
 [3.単] [名]=の 事 たくさん 言う=[未完.B] =[逆接]

ṅoro ṽlasa ṽɒ-ji ˈmɛ-nɒ ˈba
 [3.単] [名] [方向]-行く [否定]-[経験.A] [推測]

「彼はラサのことをたくさん話しているが、ラサに行ったことはないようだ」

これらはいずれも、前節までと同様、視点の置き方を基準に説明することができる。

4.2.2 疑問文と伝達文

疑問文では視点の中心が聞き手に移る。つまり、主語が2人称で内容が意図的行為に関するものである場合は `nɒ が用いられる。

- (66) ṅo ɿɛ ˈa-mɛ ˈnɒ=me
 [2.単] 包子 [方向]-作る [経験.A]=[疑問]

「あなたは包子を作ったことがありますか？」

主語が1人称ないし3人称の疑問文であっても `nɒ が用いられることが多い。§ 4.1.4 においても疑問文でA系列助動詞が用いられやすい傾向にあることを述べたが、経験の助動詞に関してはその傾向がもっと強いと言える。

- (67) a. ṅoro ɿɛ ˈa-mɛ ˈnɒ=me
 [3.単] 包子 [方向]-作る [経験.A]=[疑問]

「彼は包子を作ったことがありますか？」

- b. ŋa ṅo ˈnɛŋji ˈa-ɕje ˈnɒ=me
 [1.単] [2.単] に対して [方向]-言う [経験.A]=[疑問]

「私はあなたに言ったことができましたか？」

c. ʔanɛ ʔgo-hdu ʔna=me

[1.双] [方向]-会う [経験.A]=[疑問]

「私たち二人は会ったことがありますか？」

d. ʔa ʔabɛ=na ʔgo-hdu ʔna=me

[1.単] 祖父=と [方向]-会う [経験.A]=[疑問]

「私はおじいさんに会ったことがありますか？」

伝達文中においては、視点の中心が本来の話し手に移る³⁶⁾。

(68) ʔseri ʔta ʔqɪŋku=na ʔgo-hdu ʔna ʔdze=rɛ

[名] [伝聞主語] 活仏=と [方向]-会う [経験.A] 言う=[状態]

「ツェリは、(自分が) 活仏に会ったことがあると言っている」

4.2.3 非意図的な内容を述べる場合

経験の助動詞もまた、非意図的な内容を述べる文にも用いられうる³⁷⁾。次の例では、自分が何年も過ごした土地で言っている場合は (69a)、テレビニュースで見る、人から聞くなどして事実として知ったことを述べる場合は (69b) の形になる。

(69) a. ʔnda ʔmantɕa ʔgonkɛ ʔzi ʔdzidzi ʔa-de ʔmɛ-na

以前 全く こんな 雪 大きい [方向]-降る [否定]-[経験.A]

「(私の知る限り) 今までにこんな大雪が降ったことはない」

b. ʔnda ʔmantɕa ʔgonkɛ ʔzi ʔdzidzi ʔa-de ʔmɛ-na

以前 全く こんな 雪 大きい [方向]-降る [否定]-[経験.B]

36) 発話源の参与しない文においても、A が用いられる例が多く見られる。過去の経験を伝聞する文においては、発話源以外の視点を想定しないことが多いのかもしれない。

ʔaja ʔdze=rɛ, ʔŋuʔtɕi ʔqɪŋku=na ʔgo-hdu ʔna ʔdze=rɛ
お母さん 言う=[状態] 指導者 活仏=と [方向]-会う [経験.A] 言う=[状態]
「お母さんが言うには、指導者は活仏に会ったことがあるそうだ」

37) 黄 (1990b: 78) によれば、ダト方言の na⁵⁵/na⁵⁵ は意志動詞に付加される。

「今までにこんな大雪が降ったことはない (らしい)」

この使い分けについても、イベント成立の場が発話源の視野の範囲内にあるかどうかという基準で説明することができる。この (69) の例で述べられている事態が成立に到るのは、今降っている、あるいは積もっている雪と、これまで長年にわたって降ったことのある雪を比べて、今の雪の方が大雪である場合である。発話源が今の雪も過去の雪もその場において直接認識している場合、この事態成立の場に居合わせたことになり、視点を接近させた形式である A 系列の `nA を用いて述べられる。一方、過去の雪について間接的な情報としてしか知らないなどの場合は、仮に現在の雪を直接見ていたとしても事態成立の場に視点を置くことはできず、B 系列の `na を用いた文になる。このため、(69b) の文は伝聞の文末助詞 de が無いにも関わらず、「聞いた話を言っているような感じがする」と母語話者に判断される。

4.3 過去の助動詞 hje/hcie/hcia

過去の行為や、過去に発生して結果状態が継続していない事態を表す文には、`hje/hcie/hcia という3種類の助動詞が用いられる。機能・形態の共通性から見て、この3つが1セットであることは確かである。そこで、過去の助動詞については、これまでのA/Bという分類に当てはめうるかという問題も含めて検討する必要がある。

この点に関して、ダト方言に関する黄 (1990b: 78-9) の分析は以下のとおりである。過去の「接辞」としては -gi³³ (本稿の `hje に対応) と -ki³³ (同 `hcie) の2種類を立てる。これとは別に、主語が3人称である場合に証拠性³⁸⁾を表すカテゴリーがあるとする (黄 1990b: 79)。-ki³³ と -kia³³ (`hcia) の対立がこれにあたり、-ki³³ は行為の過程を話者が見ていたということを、-kia³³ は行為の結果を見たということを含意するという。表 3 に、本稿におけるメト方言の分析結果 (§ 4.3.5 参照) と対照させて示す³⁹⁾。

次節以降、筆者が調査した実際の用例を記述し、分析を行う。なお、この第 4.3 節

38) 原文では“肯定程度”。「確実性の度合い」というような意味である。

39) このほか、メト方言の hcie/hcia に対応する別方言の形式として hdie/hdia があるようである。これらの形式は協力者の発話において時折用いられたが、下拖郷巴里村周辺の方言形式であるとして協力者自身が hcie/hcia に訂正した。本稿では考察の対象から除外する。

表3 過去の助動詞

| ダト方言 (黄 1990b: 78-9) | | | メト方言 (本稿) | | |
|----------------------|------------|--------------------|-----------|------------|-----|
| 1 | | -gi ³³ | ´hjie | [発話源: +意志] | A-1 |
| 3 | 行為の過程を直接見た | -ki ³³ | ´ncie | [発話源: -意志] | A-2 |
| | 行為の結果を直接見た | -kia ³³ | ´ncia | | B |

内部では、助動詞 ´hjie/´ncie/´ncia の語釈を一括して [過去] と標示する。その上で、第 4.3.5 節において分析を行い、´hjie を [過去.A-1], ´ncie を [過去.A-2], ´ncia を [過去.B] とすることを提案する。

4.3.1 発話源による意図的行為

ここでは、発話源 (locutor) による意図的な行為について述べる文を見る。ここまで見てきたとおり、発話源とは陳述文主節における話し手、疑問文における聞き手、伝達文における本来の話し手と一致する人物である。通常、発話源の意図的行為を述べる文では、´hjie のみが用いられ、他の二つは容認されない⁴⁰⁾。

以下に話し手自身の意図的行為を述べる陳述文の例を挙げる。

- (70) a. ʔenl ʔa ʔmenko=rə ʔnge ʔa-mwi ʔhji
 昨日 [1.単.強調] 病院=の 扉 [方向]-閉める [過去]
 「昨日、私が病院の戸を閉めた」
- b. ʔnda ʔa ʔneŋje=rə ʔje=gə ʔmɯ ʔhji
 以前 [1.単] [名]=の 家=中に 住む [過去]

40) 文末表現との組み合わせによってはこの限りではない。例えば、「～であるように見える」を意味する nke と共に ´ncia が用いられる例がある。(cf.) に示したように、ʔcoŋja ʔa-mə 「酔って暴れる」は、意図的行為としても扱われうる。

ʔjemi ʔa ʔcoŋja ʔa-mə ʔncia=nke=rə
 昨夜 [1.単] 酒乱行為 [方向]-作る [過去]=様子である =[状態]
 「私は昨夜、酔って暴れたみたいだ」(朝になってから、荒れた部屋などを見て)

(cf.) ʔa ʔjemi ʔcoŋja ʔa-mə ʔhji
 [1.単] 昨夜 酒乱行為 [方向]-作る [過去]
 「私は昨夜、酔って暴れた」(自分で記憶している)

「以前、私はネッギエの家に住んでいた」

次の例は、聞き手の意図的行為について尋ねる疑問文である。

- (71) a. `no ʔenA ʔenko=rə ʔnge ʔa-mwi ʔnje=me
[2.単.強調] 昨日 病院=の 扉 [方向]-閉める [過去]=[疑問]

「昨日、あなたが病院の戸を閉めましたか？」

- b. ʔno ʔenA ʔbeji=wu ʔgə-ntçi ʔnje=me
[2.単] 昨日 チベット文=を [方向]-見る [過去]=[疑問]

「あなたは昨日、チベット語の本を読みましたか？」

次に、引用型埋め込み文の例を挙げる。いずれも、本来の話し手によって行われた行為について述べている。

- (72) a. ʔnima ʔtu ʔlozo=wu ʔga-da ʔmə-nji ʔde
[名] [伝聞主語] [名]=を [方向]-ぶつ [否定]-[過去] [伝聞]

「(ニマ本人によれば) ニマはロゾを殴っていないそうだ」

- b. ʔnkeza ʔtu ʔnge ʔa-mwi=nji ʔdze=rɛ
[名] [伝聞主語] 扉 [方向]-閉める=[過去] 言う=[状態]

「ケザが戸を閉めたと(本人が)言っている」

4.3.2 非発話源のみが参与する文

次に、非発話源の意図的な行為を述べる文で、発話源が参与しないものを見る。このタイプの例では、ʔncie と ʔncia の2つが容認され、ʔnje は容認されない。一般に、ʔncie (～ ʔnci) を用いた文は、話し手がイベントが発生した場面に居合わせたことを含意する。その含意がない場合は ʔncia が用いられる。(73) は第三者が主語となる例、(74) は聞き手が主語の例である。

(73) a. ʔoro ʔnge ʔa-mwi ʔnci
 [3.単] 扉 [方向]-閉める [過去]

「彼が戸を閉めたよ」(話し手が直接見て知っている)

b. ʔoro ʔnge ʔa-mwi ʔncia
 [3.単] 扉 [方向]-閉める [過去]

「彼が戸を閉めた」(話し手は直接見たわけではない)

c.* ʔoro ʔnge ʔa-mwi ʔnji
 [3.単] 扉 [方向]-閉める [過去]

(74) a. ʔenɒ ʔno ʔtseri=rə ʔbɒŋʔ=wu ʔgi-ji ʔncie ʔmo
 昨日 [2.単] [名]=の 子供=を [方向]-手伝う [過去] [確認]

「昨日、あなたがツェリの子供を手伝いましたよね」(直接見て知っている)

b. ʔenɒ ʔno ʔtseri=rə ʔbɒŋʔ=wu ʔgi-ji ʔncia ʔmo
 昨日 [2.単] [名]=の 子供=を [方向]-手伝う [過去] [確認]

「昨日、あなたがツェリの子供を手伝ったんですね」(直接見たわけではない)

この、(73), (74)に見る ʔncia と ʔncie の使い分けは、§ 4.1.2 の例 (47) で見た、完了の助動詞の使い分けと並行的である。すなわち、イベント実現の場に発話源が居合わせたかどうかによって助動詞を使い分けている。このことから、ʔncie がA系列に、ʔncia がB系列に相当する機能を持っていると考えられる。

次に、発話源の参与しない疑問文を観察する。

他の助動詞に関して、疑問文ではA系列助動詞が用いられやすくなることを見てきた。第三者の意図的行為について尋ねる疑問文に用いられうる過去の助動詞は、ʔncie/ʔncia のみである。(75c)のように ʔnje を用いることは容認されない。

(75) a. ʔenɒ ʔoro ʔmɛnko=rə ʔnge ʔa-mwi ʔncie =me
 昨日 [3.単] 病院=の 扉 [方向]-閉める [過去] =[疑問]

「昨日、彼が病院の戸を閉めましたか？」

b. ʃenɫ ʔoro ʔmɛnko=rə ʔnge ʔa-mwi ʔncia =me
 昨日 [3.単] 病院=の 扉 [方向]-閉める [過去] =[疑問]

「昨日、彼が病院の戸を閉めましたか？」

c. *ʃenɫ ʔoro ʔmɛnko=rə ʔnge ʔa-mwi ʔnje =me
 昨日 [3.単] 病院=の 扉 [方向]-閉める [過去] =[疑問]

次の例は、話し手自身の過去の行為について尋ねる疑問文である。(76a)では ʔncia が用いられている。(76b)では過去の助動詞に直接疑問助詞が付加されているわけではないが、文中において ʔncia が用いられていることが確認できる。

(76) a. (話し手は酔ってからの記憶がない)

ʔŋa ʔjɛi ʔcoŋʃa ʔa-mə ʔncie ʔme
 [1.単] 昨夜 酒乱行為 [方向]-作る [過去] [疑問]

「私は昨夜、酔って暴れましたか？」

b. (話し手はいつラサに行ったか覚えていない)

ʔjezi ʔŋa ʔŋjɛba=gə ʔlasa ʔʌ-ji ʔncia ʔdzi=mɛ ʔɛ
 去年 [1.単] 8月=中に [名] [方向]-行く [過去] [コンピュータ]=[コンピュータ.否定] [状態]

「去年、私は8月にラサへ行ったのでしょうか？」

4.3.3 発話源の参与

他の助動詞に関して、非発話源が主語であっても、発話源が明らかに参与している実現済みの内容を述べる文においては A 系列助動詞が用いられることを見てきた。過去の助動詞に関しては、このタイプの例では ʔncie (~ ʔnci) のみが容認される。ʔncia, ʔnje の2つを用いることはできない。

(77) ʃenɫ ʔŋɔma ʔŋa=da ʔa-ŋɛ ʔnci/*ʔncia/*ʔnji

昨日 [名] [1.単]=に [方向]-叱る [過去]

「昨日ドマが私を叱った」

- (78) ʔenɒ ˈno ʔa=wu ˈgi-ji ˈncie ˈmo
 昨日 [2.単.強調] [1.単]=を [方向]-手伝う [過去] [確認]
 「昨日、あなたが私を手伝ってくれましたよね」

(77), (78) は話し手に向かって行われた行為についての陳述文である。前者では第三者が、後者では聞き手が主語である。いずれにおいても、ˈncie を用いたのみが容認可能であり、他の ˈncia, ˈncie を用いることは容認されない。

次の例は、引用文中における発話源に向かって行われた行為について述べる例である。やはり ˈncie (ˈnci) が用いられている。

- (79) ˈnkeza ˈɕje=ɾɛ, ʔenɒ ˈndɛma ˈtɔ=ji ˈzama ˈgo-mɛ ˈnci=dɛ
 [名] 言う=[状態] 昨日 [名] [伝聞主語]=ために 食事 [方向]-作る [過去]=[伝聞]
 「ケザが言うには、昨日ドマが彼のためにご飯を作ってくれたそうだ」

4.3.3 非意図的内容を述べる場合

次に、非意図的に生起した事態が述べられる例を見る⁴¹⁾。(80)に見るように、事態の結果が発話の時点ですでに存在しない場合には、意図的でない行為や制御不可能な事態であっても ˈncie, ˈncia が用いられうる⁴²⁾。ˈncie は意図的な行為を述べる場合にしか用いられない。

- (80) a. ʔa ˈtɕi ˈa-ɲi ˈnci, (ˈxɛ ˈa-nci ˈwua.)
 [1.単] 何か [方向]-病む [過去] もはや [方向]-治る [完了.B]
 「私は病気にかかった (が、もう治った)」
- b. ʔa ˈnɾɛʔduʔdu ˈnci
 [1.単] 吐き気がする [過去]

41) ダト方言においては、これらの助動詞が意志動詞とともにしか現れないと記述されている (黄 1990b)。

42) ただし、過去の制御不可能な事態について述べる場合は、後に挙げる (81) のように助動詞のない形式が用いられることが多く、ˈncie, ˈncia が用いられる例は少ない。

「(車に酔って) 私は吐き気がした」

b'. ʔa ʔa-npe ʔji

[1.単] [方向]-吐く [過去]

「私は吐いた」

c. ʔena ʔoro ʔonlu ʔncia, ʔmaʔi ʔnbaje ʔso ʔncia.

昨日 [3.単] 暑い [過去] 非常に のどが渴く [過去]

「昨日、彼は暑くて非常にのどが渴いた」

話し手自身の過去の状態について述べる (80a, b) では ʔncie が用いられている。意図的に「吐いた」ことを述べる (80b') において ʔnje (ʔji) が用いられているのとは異なる。また、非発話源の過去の状態を述べる (80c) では ʔncia が用いられている。

4.3.5 考察：A系列の分岐

以上の観察から、過去時制に関わる3つの助動詞 ʔnje/ʔncie/ʔncia が、ダパ語の助動詞体系の中でどのように位置づけられるかについて考察する。

まず、これまでに見てきた他の助動詞との対照を行う。すでに、未完了・完了・経験の助動詞について、イベントがすでに実現していて、その実現の場に発話源が視点を置いていればA系列が用いられることを見た (59)。また、その具体的な現れについては、発話内容が実現済み (realis) のものか未実現 (irrealis) のものかで異なるという点に § 3.2.2 で言及した。そこで、ここでは各助動詞の実現済みの事態に関する分布を過去の助動詞の分布と比較する。つまり、未完了助動詞については現在進行中の内容を述べる用法のみを比較の対象とする。

対照結果は、表 4 に示すとおりである。「-」は適当な例が見つからなかったことを表し、「X」は別の語彙が用いられることを表す。また、待遇表現、主観的推測など、発話態度や特殊な文脈が関わる用法は省いてある。

まず、意図的に引き起こされた内容について述べる文を見ると、ʔncia のみがB系列に相当する分布を示し、ʔnje および ʔncie は共にA系列に相当する分布を示している。そこでいったん ʔnje を A-1, ʔncie を A-2, ʔncia を B として、考察を進めることとする。

表4 助動詞の分布

| | 主語 (備考) | 未完了 | 完了 | 経験 | 過去 |
|-------------|----------------|-----|-------|-----|-------|
| 意 図 的 | 発話源 | A | A | A | ʼhjie |
| | 非発話源 (発話源参与なし) | B | B | B | ʼncia |
| | 非発話源 (発話源参与あり) | A | A | A | ʼncie |
| 非意 図的 | 発話源 | X | B/(A) | - | ʼncie |
| | 非発話源 | B | B | A/B | ʼncia |

このように仮定したとき、問題となるのは、発話源の非意図的状态を述べる (80a, b) において ʼncie が用いられる点である。(80a, b) は発話源の心理的状态を述べる文であるので、表4では心理的状态に関わる例のみを対象としている。よって、次のような例と比較する必要がある。

(81) a. ʼŋa ʼŋoro =berə ʼdo-hmo ʼwua = (56a)

[1.単.強調] [3.単] = 関して [方向]-忘れる [完了.B]

「私は彼のことを忘れてしまった」

b. ʼŋa ʼŋoro =berə ʼdo-hmo ʼwu = (57)

[1.単.強調] [3.単] = 関して [方向]-忘れる [完了.A]

「私は彼のことを忘れたようだ (／忘れることにした／忘れたことにする)」

完了の助動詞については、話し手自身のことであっても (81a) のように B 系列を用いる方がより一般的である (§ 4.1.6)。

ここで、ʼhjie/ʼncie/ʼncia の意味を再度考えておく必要がある。これら「過去の助動詞」は、特に過去の状態を述べるのに用いられる場合、事態の結果が発話の時点ですでに存在しないことを含意する。過去の行為を述べる文においては、(73d) のように結果状態が継続 (割られた薪がそこにある) していても用いられうることが確認されている。ただし、この例において焦点となっているのは「薪を割った」という行為であり、割られた薪 (結果状態) があるかないかは問題とならない。結果状態が当然継続しているような事態を述べる際は、(82) のように助動詞を用いない形式が用いられる。

- (82) a. 'wodzi ʔdo-ndzɯ-a
 帽子 [方向]-忘れる-[離接]
 「(私は) 帽子を忘れた」
- b. 'medo ʔŋo-bw-a
 花 [方向]-咲く-[離接]
 「花が咲いた」

過去の助動詞が用いられるのは、「過去に何らかの事態があった」かつ「その結果状態には焦点が与えられない」場合に限定されていると言える。つまり、(81) のように ʔwu/wua (§ 4.1) によって非意図的内容を述べる場合のような、成立した結果のみに言及するという用法がない。

事態が意図的なものであるかどうかに関わらず、'ncie/'ncia を用いた文では過去の場面に言及する必要がある。そのため、(80) のような過去の (かつ、発話時にはすでに存在しない) 状態を述べる文においては、生起した状態自体が「イベント実現の場」に準ずると考えられる。そのため、その状態を発話源が直接観察した (80a, b) において A 系列が用いられる。一方、(80c) では言及の対象となる「暑くてのどが渴いた」という他者の心理的状況は、発話源の視野の範囲外にあるものである。よって、B 系列が用いられる視点なし文となる。

以上のことから、他の助動詞と対応する A/B の区別の境界線は、'ncie と 'ncia の間にあると結論付けられる。過去の事態を表す助動詞には、A 系列として 'ncie と 'ncie の 2 つがあり、B 系列の 'ncia と対立をなす。ただし、'ncie は発話源による意図的な行為を述べる場合には用いることができない。そのような場合は 'ncie を用いなければならないという制限がある。'ncie の用法はダパ語メト方言の助動詞体系の中では有標であるといえる。

「イベント実現の場」もしくはそれに準ずる「過去の状態」に言及しない場合はこれらの助動詞を用いることができないため、「イベントが実現される場面がどの発話参加者の視野の範囲内にも存在しない場合」に関する用法は想定する必要がない。また、今のところ、発話源の視野の範囲内でイベントが実現していても他者の視野を優先す

る表現、すなわち待遇表現に相当する例は見つかっていない。

(83) 'hjie (A-1) / 'hcie (A-2) / 'hcia (B) が用いられる条件：

Aは視点ありの文、Bは視点なしの文に用いられる。視点あり文のうち、内容が発話源による意図的な行為についての文では A-1 が、それ以外の視点あり文では A-2 が用いられる。

- i. イベントが実現される場面ないしは過去の状態に発話源の視点が置かれる場合は、視点あり。
- ii. (i) に当てはまらない場合は、視点なし。

4.4 反復の助動詞 ndu/ndue

反復の助動詞 'ndu/'ndue は、未来における非意図的な事態の実現可能性、繰り返し生じる事態などを表す⁴³⁾。この助動詞は、ダト方言の記述 (黄 1990b: 79) にある、無意志動詞“經常体”の ndu³³ (1人称) / ndyø³³ (3人称) に対応する。

この助動詞に関するA系列 / B系列の分布は、前節までに見たような直前の動詞句によって表される内容と視点との関係から説明することはできない。結論を先に言えば、この助動詞が付加されることによって、イベントが脱意図化、非制御化され、視野から外れた場で実現されるものとして扱われると考えられる。また、このことから、A系列 / B系列の区別に関わる接辞が、形態的には助動詞と融合しているものの、統語上は助動詞が付加された文の外側に付加されていることが明らかになる。

4.4.1 「無意志動詞」に付加される場合

まず、'ndu/'ndue の直前の動詞がいわゆる「無意志動詞」であり、動詞句が非意図的

43) 白井 (2006a: 135) では、事態生起の可能性が最も基本的なものであると考え、「可能の助動詞」としていたが、可能動詞と紛らわしいため名称を変更した。この助動詞は、「できる」を意味する動詞 (可能動詞) 'ndu/'ndue が文法化して成立したものと考えられる。動詞に後続する 'ndu/'ndue が「できる」以外の意味を持つ場合にのみ、これらを助動詞とみなしうる。動詞 + 'ndu/'ndue が「～することができる」を意味する場合は、'ndu/'ndue は動詞であり、動詞連続を形成している。助動詞である場合と動詞である場合とでは -ε の機能が異なる。詳しくは白井 (2006a: 67-69, 165-167) を参照していただきたい。

に発生する事態を表す例について述べる。本節では陳述文のみを扱い、疑問文については § 4.4.3 において後述する。

4.4.1.1 発話源が主語となる陳述文

まず、話し手が主語となる、非意図的事態を表す動詞句に $\acute{ndu}/\acute{ndu\epsilon}$ が付加された陳述文の例を見る。次の (84) は、現在および近未来を含む非過去の時間において、繰り返し生起したり継続的に存在する事態を述べる例である。いずれの例においても、最も自然に用いられるのは $\acute{ndu\epsilon}$ である。協力者に \acute{ndu} に置き換えうるかどうかについて尋ねたところ、(84a) ではやや不自然とされ、(84b) では容認された。ただし、最も自然に用いられるのは $\acute{ndu\epsilon}$ であるため、例文 (84b) の中では \acute{ndu} に (?) を付加してある。

(84) a. $\acute{\eta}a$ $\acute{r}endzo$ $\acute{t}seri=da$ $\acute{c}e?dzu$ $\acute{ndu\epsilon}/?\acute{ndu}$
 [1.単] しばしば [名]=に 腹を立てる [反復.B]/[反復.A]

「私はしょっちゅうツェリに腹を立ててしまう」

a'. $\acute{\eta}a$ $\acute{r}endzo$ $\acute{t}seri=da$ $\acute{c}e?dzu=re$
 [1.単] しばしば [名]=に 腹を立てる =[状態]

b. $\acute{\eta}a$ $\acute{r}ezo=wu$ $\acute{h}ga=\acute{ndu\epsilon}/(?)\acute{h}ga=\acute{ndu}$
 [1.単] 甘い=を 好む=[反復.B]/好む=[反復.A]

「私は甘いのが好きだ」

b'. $\acute{\eta}a$ $\acute{r}ezo=wu$ $\acute{h}ga=re$
 [1.単] 甘い=を 好む=[状態]

c. $\acute{\eta}a$ $\acute{r}endzo$ $\acute{q}aci=na$ $\acute{h}du=\acute{ndu\epsilon}$
 [1.単] しばしば [名]=と 出くわす=[反復.B]

「私はしょっちゅうタシに出くわします」

心理的状态を表す (84a, b) は、いずれも (84a', b') のように re を用いて言い換え可能である。 re は § 3.4.2 で言及した、話し手自身の心理的状态を述べるのに用いられる文

末助詞で、未完了B系列助動詞の *de* と相補的な分布を示す。ところが上記の例では B 系列の *ndue* と非B系列の *re* が入れ替え可能になっている。この問題は § 4.4.4 において考察する。

ndu/ndue は、過去における非意図的事態の繰り返しや生起可能性について述べる際にも用いられる。例 (85) を見ると、*ndu* が用いられる例も *ndue* が用いられる例も見られる。その使い分けについては、直前の動詞句の性質からは説明できない。

(85) a. *ŋa nda deko ŋi ma-ndu*

[1.単] 以前 少しも 病む [否定]-[反復.A]

「私は昔は少しも病気をしなかった」

b. *ŋa nda lezizi =da rendzo nkigi'za a-te ndue*

[1.単] 以前 小さい =に しばしば 寝小便 [方向]-排泄する [反復.B]

「私は小さい頃しょっちゅうおねしょをした」⁴⁴⁾

4.4.1.2 非発話源が主語となる陳述文

非発話源が主語となる場合、単に第三者のことを述べるという文脈であれば、(86a, c) のように *ndue* のみが自然に用いられ、*ndu* の容認度はかなり低い⁴⁵⁾。ところが、(86b, d) のように話し手が視点を置いて述べやすい文脈のもとで発話される場合は、*ndu* がほぼ問題なく容認される。このことは、非発話源が主語となる意図的内容の文における他の助動詞の分布と並行的である。意図の有無よりも視点の置かれ方が重要な基準となっていることが確認できる。

44) 動詞 *a-te* 「排泄する」は意志動詞として用いられうるが、「寝小便をする」という動詞句が非意図的事態を表すものであるため、ここで例として挙げた

45) なお、(84a, b) について *re* による言い換えが可能であるのとは対照的に、(86c) は *de* を用いて言い換えることができる。この場合はB系列助動詞同士で対応した分布を示すため、問題ない。

ŋoro zozo =wu nga=de

[3.単] 辛い =を 好む=[未完.B]

(86) a. ʔseri ʔjo=ɾA ʔbAɲjɛ=da ʔrendzo ʔceʔdzu ʔnduɛ/*ʔndu
 [名] 自分=の 子供=に しばしば 腹を立てる [反復.B]/[反復.A]
 「ツェリはいつも自分の子に腹を立てている」

b. (?) ʔseri ʔjo=ɾA ʔbAɲjɛ=da ʔrendzo ʔceʔdzu ʔndu
 [名] 自分=の 子供=に しばしば 腹を立てる [反復.A]
 「ツェリはいつも自分の子に腹を立てている」(話し手はその状況を常時目に
 して知っている)

c. ʔjoro ʔzozo=wu ʔhga=nduɛ / ??ʔhga=ndu
 [3.単] 辛い=を 好む=[反復.B]/好む=[反復.A]
 「あの人は辛いのが好きだ」

d. ʔjoro ʔzozo=wu ʔhga=ndu
 [3.単] 辛い=を 好む=[反復.A]
 「あの人は辛いのが好きなんだよ」(話し手は頻繁に一緒に食事をしている
 ためよく知っている)

次のような、話し手が参与している文においては、ʔndu/ʔnduɛ のいずれも容認される。特に文脈を強く設定することなく、いずれも自然に用いられる。ʔndu と ʔnduɛ の意味の差は話し手もほとんど認識していない。これは (86b, d) と並行的な現象であると考えられる。話し手の視点が置かれることが自然な内容だからである⁴⁶⁾。

(87) ʔdaci ʔrendzo ʔja=da ʔceʔdzu ʔnduɛ/ʔndu
 [名] しばしば [1.単]=に 腹を立てる [反復.B]/[反復.A]
 「タシはしょっちゅう私に腹を立てる」

「あの人は辛いのが好きだ」

46) この例も ʔde を用いて言い換えることができる。(84a, b) よりも A 系列助動詞が容認されやすい文であるにもかかわらず B 系列の ʔde を用いて言い換え可能である点については、考察を要する。

ʔdaci ʔrendzo ʔja=da ʔceʔdzu ʔde
 [名] しばしば [1.単]=に 腹を立てる [未完.B.強調]

4.4.2 「意志動詞」に付加される場合

ダト方言の記述において、 $\acute{n}du/\acute{ndu}\epsilon$ に対応する $ndu^{33}/ndy\emptyset^{33}$ は無意志動詞に付加されるものと記述されているが(黄 1990b: 79)、メト方言では直前がいわゆる「意志動詞」であっても用いられる。

ただし、主語が発話源である場合は、意図的事態を述べる動詞句に $\acute{n}du/\acute{ndu}\epsilon$ が付加されても「～できる」という意味にしか解釈されない。(88b) は「しょっちゅう賭け事をするのか」という意味では用いられず、必ず「あなたは賭け事ができますか?」という意味になる。発話源が習慣的に繰り返し行う行為を述べる際は、(88a, c) のように未完了の助動詞が用いられる。

- (88) a. $\bar{n}o$ $\acute{n}\Delta\Gamma\eta\Delta$ $\bar{\zeta}u\bar{d}u$ $\bar{d}i=me$
 [2.単] 毎日 賭け事をする [未完.A.強調]=[疑問]
 「あなたは毎日賭け事をやってるんですか?」
- b.# $\bar{n}o$ $\bar{\zeta}u\bar{d}u$ $\acute{n}du=me$
 [2.単] 賭け事をする [反復.A]=[疑問]
- c. $\bar{n}je$ $\bar{s}ore\bar{s}o$ $\bar{\zeta}ifa$ $\bar{t}e$ $\acute{d}\Delta$
 [1.複] 毎朝 粥 飲む [未完.A]
 「私たちは毎朝おかゆを食べる」

つまり、発話源が主語で意図的内容を述べる場合は助動詞 $\acute{n}du/\acute{ndu}\epsilon$ は用いられない。よって本節では、非発話源が主語となる例のみを扱う。

意図的事態を表す動詞句に助動詞 $\acute{n}du/\acute{ndu}\epsilon$ が付加されると、習慣的に繰り返し生起する事態を述べる文となる。

- (89) a. $\bar{n}oro=\Gamma\Delta$ $\bar{n}evo$ $\bar{k}ebi=r\emptyset$ $\acute{d}uwa$ $\bar{t}e$ $\acute{n}du\epsilon$
 [3.単]=の 姉妹 年長の=の タバコ 飲む [反復.B]
 「彼のお姉さんはタバコを吸う」

b. ʔoro ʔendzo ʔtəli ʔndue

[3.単] しばしば 嘘をつく [反復.B]

「あの人はいつも嘘をつく」

(90) a. ʔoro ʔendzo ʔa-do ʔdzədi ʔze ʔndue

[3.単] しばしば [1.単]-ところ 手紙 書く [反復.B]

「あの人はしょっちゅう私に手紙をくれる」

b. ʔaba ʔno ʔa=wu ʔnde=ndwe =mo

兄/姉[呼称] [2.単] [1.単]=を なぐる=[反復.B] =[確認]

「兄さん、あなたは私をぶつ（ことがある）よね」

上記の例のうち、(89) は発話源が発話内容に参加しない例、(90) は発話源が参加している例である。いずれの例においても、ʔndue (ndwe) が最も用いられやすい。

次の例では、ʔndu も用いられうることが確認できた。話し手と同居している娘について述べる文である。

(91) ʔa=rə ʔantəi ʔalewu ʔe ʔmə ʔndue/ʔndu

私=の 娘 ときどき 包子 作る [反復.B]/[反復.A]

「私の娘はときどき包子を作る」

§ 4.4.1以降これまでに見てきた例から、陳述文においては B系列の ʔndue が非常に優勢であるといえる。参加者の人称および意図性に関するいずれの組み合わせについても、ʔndue が容認されうる。この点で、助動詞 ʔndu/ʔndue は先行研究の言う人称や意志性の基準から最も大きく逸脱していると言える。

4.4.3 疑問文

疑問文においては、聞き手を主語とするかどうかに関わらず、A系列の ʔndu が用いられることが多い。主観的判断を求めることで聞き手への待遇表現になっているのではないかと考えられる。

次の (92) は聞き手が発話内容に参加している疑問文の例である。(92a, b) において *ndu* が用いられている⁴⁷⁾。

- (92) a. *no* *rendzo* *tseri=da* *ce?dzu* *ndu=me*
 [2.単] しばしば [名]=に 腹を立てる [反復.A]=[疑問]
 「あなたはしょっちゅうツェリに腹を立てるんですか？」
- b. *tsɔnba* *rendzo* *no=da* *ce?dzu* *ndu=me*
 社長 しばしば [2.単]=に 腹を立てる [反復.A]=[疑問]
 「社長はしょっちゅうあなたに腹を立てるのですか」

次に、第三者が主語となり発話源が関わらない疑問文の例を (93) に挙げる。(92) と同様、いずれの例においても *ndu* が用いられている。なお、(93b, c) のように未来の事態について用いられるのは、基本的に疑問文においてのみである⁴⁸⁾。事態が発生する可能性があるかどうかを問う疑問文を形成する。

- (93) a. *tseri* *jo=ra* *bɔhɔ=da* *rendzo* *ce?dzu* *ndu=me*
 [名] 自分=の 子供=に しばしば 腹を立てる [反復.A]=[疑問]
 「ツェリはいつも自分の子に腹を立てているんでしょうか」
- b. *qaci* *somuni=je* *qa=da* *ce?dzu* *ndu=me*
 [名] 明日=も 私=に 腹を立てる [反復.A]=[疑問]
 「タシは明日も私に腹を立てるんでしょうか？」

「タシはしょっちゅう私に腹を立てる」

47) 話し手に向けられる事態について尋ねる文では *ndu* が用いられず、文末助詞 *re* が用いられる。

- no* *rendzo* *qa=da* *ce?dzu* *re=me*/**ndu=me*
 [2.単] しばしば [1.単]=に 腹を立てる [状態]=[疑問]/[反復.A]=[疑問]
 「あなたはいつも私に腹を立てていますか」

48) 対応する陳述文では、遠い時制を表す文末表現 *-are* が用いられる。

- (cf.) *qaci* *somuni* =je *qa=da* *ce?dzu* -a *re*
 [名] 明日 =も 私=に 腹を立てる [-遠時]

c. (ŋoro {A ŋənke bebe=ji te=ndwe mo,) ŋoro hse=wu nadza
 [3.単] 酒 あんな 多い=[類別] 飲む=[反復.B] [確認] [3.単] 肝臓=に 病気

hti=ndu =mε

患う=[反復.A] =[疑問]

「(あの人はあんなにたくさんお酒を飲むでしょう、だから) 肝臓が病気になるんじゃないでしょうか」

次の (94) は話し手が主語となる疑問文の例である。(94a) では ndu が用いられている。(94b) は疑問文の中では例外的に ndue が用いられる。これは、話し手自身では判断のつかない内容について聞き手の観察する範囲での客観的事実がどうであるか尋ねる文である。A系列助動詞はしばしば主観的判断を問うのに用いられる。そのため、客観的事実を問う場合にはB系列助動詞が選ばれやすいのではないかと考えられる。同じ内容を問うのに ndu を用いることも可能で、それぞれを用いた文の表す意味の違いは話し手には意識されない。

(94) a. somuŋi ŋa jo-re=wu gi-ji cu ndu=mε

明日 [1.単] 友達-[複]=を [方向]-手伝う 要する [反復.A]=[疑問]

「私は明日、友達を手伝うべきだろうか？」(そういう状況になりうるかどうか)

b. ŋa rendzo tseri=da ce?dzu ndue=mε/ndu=mε

[1.単] しばしば [名]=に 腹を立てる [反復.B]=[疑問]/[反復.A]=[疑問]

「私はいつもツェリに腹を立てていますか？」

前節で見たように、意図的行為を述べる文であっても、3人称を主語とするものであれば ndu/ndue が用いられる。ここで、3人称を主語とする意図的行為について尋ねる疑問文を挙げておく。(95a) において最も自然に用いられるのはA系列の ndu であるが、B系列の ndue と入れ替えても問題ない。一方、聞き手と同居している娘が主語となる (95b) では ndue の容認度が低くなる。

(95) a. ʔnoɾo ʔpaɾiŋa ʔhdeçi ʔmø ʔndu=me / ʔndue=me

[3.単] 毎日 平パン 作る [反復.A]=[疑問]/[反復.B]=[疑問]

「あの人は毎日平パンを作りますか？」

b. ʔno=ɾa ʔzantçi ʔaleale ʔle ʔmø ʔndu=me /ʔndue=me

[2.単]=の 娘 ときどき 包子 作る [反復.A]=[疑問]/[反復.B]=[疑問]

「あなたの娘さんはときどき包子を作りますか？」

以上、助動詞 ʔndu/ʔndue を含む疑問文においてはA系列の ʔndu が非常に用いられやすいことを観察した。これは、陳述文とは逆の状況である。ただし、他の助動詞においても疑問文ではA系列がやや優勢になることが確認できており、ある程度並行的であるといえる。

4.4.4 考察：離接標識の付加される位置

ここまで見てきたように、助動詞 ʔndu/ʔndue の分布に関して特に特徴的なのは、陳述文において ʔndue が非常に用いられやすいという点である。この偏りは助動詞の直前までの命題的内容に関係なく見られる。細かいニュアンスの差異について検討する前に、まずこの点について考察する必要がある。

他の助動詞における助動詞の分布と併せて考えると、B系列の ʔndue が用いられやすいという事実は、助動詞 ʔndu/ʔndue が付加された文の意味と視点の捨象が結びつきやすいことを示唆している。つまりここで注目すべきは、直前の動詞句の特徴ではなく、その文全体が表す意味の性質である。

例えば (84a) において述べられているのは、「私がつェリに腹を立てる」という事態が「しょっちゅう生じる」という事実である。「私がつェリに腹を立てる」という内容そのものは話し手自身の心理的状况であるため、(84a) のように re を付加して述べることができ、未完了B系列助動詞は用いられない（以下に例を再掲する）。ところが、そのような状態がしばしば生起するという内容は、ある程度の期間をかけて観察される客観的事実である。助動詞 ʔndue が付加されることにより、話し手の視点が捨象さ

れ、全体として非意図的事態を客観的に述べる助動詞句になっていると考えられる。

- (96) a. ʔa ʔrendzo ʔseri=da ʔceʔdzu ʔndue/?ʔndu
[1.単] しばしば [名]=に 腹を立てる [反復.B]/[反復.A]
「私はしょっちゅうツェリに腹を立ててしまう」 = (84a)
- b. ʔa ʔrendzo ʔseri=da ʔceʔdzu=re = (84a')
[1.単] しばしば [名]=に 腹を立てる =[状態]

結論として、ʔndue が用いられやすいのは ʔndu/ʔndue の付加された助動詞句に発話源の視点が置かれにくいからであると言える。言い換えれば、全体として「遠射」の文になりやすい。そのため、陳述文においては ʔndu が用いられることが少なく、他のA系列助動詞と並行的な機能を十分に保っていない。それにもかかわらずA系列の ʔndu が用いられている陳述文は、あえて話し手の視点を強調する文になっていると言えるだろう。例えば (86d) は、「あの人は辛いものが好きだ」という内容を話し手がとりわけ熟知しているという文脈があれば容認される。以下に再掲する。

- (97) ʔgoro ʔzozo=wu ʔhga=ndu
[3.単] 辛い=を 好む=[反復.A]
「あの人は辛いのが好きなんだよ」(話し手は頻繁に一緒に食事をしているためよく知っている) = (86d)

ʔndu/ʔndue においても基本的には (59) に示した条件を書き換える必要はないが、「視点を行為の場に置いて述べる」機能が働くことがない。このため、発話源の視点を強調するという機能のみが残り、陳述文では ʔndue が好まれ、疑問文では ʔndu が好まれるというアンバランスな分布になっている。

以上の考察から、ʔndu/ʔndue に共通する意味機能として「反復」のほかに「脱“視野”化」があり、A系列かB系列かの標示はそれとは別に行われていると考える必要がある。つまり、ʔndu/ʔndue が付加された文においては、助動詞語幹 ʔndu が動詞に後続す

ることによって脱視野化される。その外側に離接標識 (disjunct marker) の $-\varepsilon$ が付加されるかどうかによってその文がA系列かB系列かが区別される、と分析できる。

A系列かB系列かという標示は、助動詞語幹によって形成される助動詞句の外側にある。§ 2.6 までに見てきた助動詞は、視野を変更する機能を持たないため、その点が確認できなかった。一方、 'ndu/ndue は視点の変更に関わる機能を含んでいる。この機能を担う形式がまず動詞に付加され、命題を形成する。その命題の外側に、視点のあり方というモダリティを示す形式が付加されている。実際にはA系列はゼロ標示であり、B系列には接尾辞 (離接標識) が付加されている。離接標識は形態上は直前の助動詞と融合している。

4.5 まとめ

第2節で示したように、ダバ語の助動詞はA系列とB系列に分けて考えることができる。第3節～第4節では、フィールドワークで得られた一次資料に基づき、それぞれの系列が持つ機能に一貫した説明が可能であることを仮定して記述と考察を行った。結論として、ダバ語の2系列の助動詞の機能は発話源の視点の置かれ方を表示することであると述べた。視点を基準と考えることにより、人称や証拠性、意図性、待遇表現との表面的関わりについても無理なく説明できる。

途中の段階で示した助動詞の選択の条件 (59, 83) を一般化すれば、以下のようになる。

(98) Aは視点ありの文、Bは視点なしの文に用いられる。

- i. イベントが実現される場面に発話源の視点が置かれ、かつ、他者の視野が優先されない場合は、視点あり。
- i'. 聞き手が主語となる陳述文では、視点なしの表現が好まれる (待遇表現)。
- ii. イベントが実現される場面がどの発話参加者の視野の範囲内にも存在しない場合、発話源の視点を強調して述べるなら、視点あり。
- iii. (i) と (ii) に当てはまらない場合は、視点なし。
- iii'. 疑問文では視点ありの表現が好まれる (待遇表現)。

(cf) A-1/A-2 の区別がある場合、発話源による意図的な行為についての文では A-1 が、それ以外の視点あり文では A-2 が用いられる。

(cf) として示した条件は、2つのA系列助動詞と1つのB系列助動詞がセットになった 'nje/'ncie/'ncia にのみ当てはまるもので、A系列/B系列の区別とは別のレベルのものである。また、この過去の助動詞においては (ii) が無効、反復の助動詞 'ndu/'ndue においては (i) が無効である。このように、それぞれの助動詞においてマイナーな差異はあるものの、述部末尾に標示される A系列/B系列の区別の基本的な条件は (98) によって説明ができる。この中で、(i'), (iii') は本来の機能から派生的に生まれた用法であると考えられるため、発話源の視点について述べた (i)~(iii) の条件が最も基本的なものである。A系列は、発話源の視点が意識される視点接近表現、B系列は発話源の視点が発話内容から離される視点分離表現とすることができる。

視点の有無の標示は、助動詞語幹に付加される接尾辞、すなわち離接標識によってなされる。命題かモダリティかという二分法を用いれば、助動詞語幹によって表される内容までが命題であり、その外側に付加される接尾辞によって文全体のモダリティが表示されている。離接標識が付加されなければその文は視点あり文となり、離接標識が付加されれば視点なし文となる。

5 結

本稿では、ダバ語メト方言（チベット＝ビルマ語派）の助動詞について、主に視点の範疇に注目しつつ、その機能と形態の分析をおこなった。

ダバ語メト方言の助動詞には、助動詞語幹のままの形式と、接尾辞が付加された形式の二系列が存在する。前者を A系列、後者を B系列として観察を行い、両者は視点の範疇によって区別されていると結論づけた。A系列は発話源の視点が置かれた文を、B系列は視点が置かれない文を形成する。ここで言う「発話源 (locutor)」とは、陳述文の話し手、疑問文の聞き手、伝達文の本来の話し手という、文のタイプによって分裂した人称を指す。

視点の近づけやすさと参加者の人称にはある程度の相関関係があるため、このシステムは結果的に主語の人称の表示に通じる性質を持っていると言えるかもしれない。しかし、主語の人称では説明のできない例が非常に多く見られることから分かるように、「一致 (agreement)」とは全く異なっており、人称との相関はあくまでも副次的なものである。

ダパ語のA/B両系列の述部は、ネワール語や現代チベット語などに見られる接合 (conjunct) / 離接 (disjunct) システムに対応した振り舞いを見せる。A系列は接合形に、B系列は離接形に対応する。そこで、B系列を形成する接辞を離接標識 (disjunct marker) と呼ぶ。助動詞を持つ文に付加される離接標識の形態は、助動詞が非完了類の場合は -e, 完了類の場合は -a である。

接合／離接システムには、人称表示型と視点表示型の二種類があると考えられる (白井 2006a: 248-250)。前者を持つ言語としては、ネワール語 (Hale 1980) がある。発話源による意図的な行為であれば接合形が、それ以外であれば離接形が取られる。人称表示型の接合／離接システムは、意志性と文のタイプによって分裂した人称表示と分析することも可能である。一方、ダパ語は後者の視点表示型接合／離接システムを持つ言語と言える。ダパ語に似たシステムを持つ言語として、現代チベット語がある。

現代チベット語の述部形式の区別も接合／離接システムの一つとされるが (DeLancey 1990)、発話源による意図的な行為だけでなく、発話源に向かって行われた行為などにおいても接合形が取られる (白井 2006a: 216-255)。

「発話源による意図的な行為」を述べる文というのは、イベント実現の場に視点を置くことが最も容易な、逆に言えば発話源の視点を分離させることが許容されにくいパターンであり、ダパ語では原則としてA系列が選ばれる。ダパ語においては、主語の人称と助動詞の選択の相関関係は、離接標識の視点表示機能から派生した人称制限であると説明しうる。

本稿では、川西走廊諸語に共通する特徴とされてきた人称の一致現象が、ダパ語メト方言には存在しないと結論づけた。では、視点表示型接合／離接システムは、同地域の共通した特徴でありうるだろうか。川西走廊諸語を記述した先行研究において、視点の範疇はあまり注目されてこなかった。そのため資料が不十分であるが、ダパ語

に隣接した地域で話されるスタウ語ゲシ方言(黄 1990a)などに、対応する現象が見られる(白井 2006a: 256-261)。視点表示型接合/離接システムが地域特徴を形成している可能性については、今後解明すべき課題としたい。

略号 ※例文の表記において断りなく使用した略号は以下の通りである。

-: 接辞境界; =: 音韻語内部の語境界; 1: 1人称; 2: 2人称; 3: 3人称; A: A系列助動詞; B: B系列助動詞; 単: 単数; 双: 双数; 複: 複数; 未完: 未完了継続相; 名: 固有名詞; 離接: 離接標識 -a; 類別: 類別詞

参考文献

【欧文】

- Aikhenvald, Alexandra Y. 2004. *Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.
- Curnow, Timothy Jowan 1997. A Grammar of Awa Pit (Cuaiquer): An indigenous language of south-western Colombia. Unpublished doctoral dissertation. Australian National University.
- Cysouw, Michael 2003. *The Paradigmatic Structure of Person Marking*. Oxford/New York: Oxford University Press.
- DeLancey, Scott 1990. Ergativity and the cognitive model of event structure in Lhasa Tibetan. *Cognitive Linguistics* 1.3: 289-321.
- Hale, Austin 1980. Person markers: Finite conjunct and disjunct verb forms in Newari. In: Ronald L. Trail et al. (eds.) *Papers in South-East Asian Linguistics No. 7*. (Pacific Linguistics, Series A - No. 53) pp. 95-106. Canberra: The Australian National University.
- Hargreaves, David J. 1991. The Concept of Intentional Action in the Grammar of Kathmandu Newari. Unpublished doctoral dissertation. University of Oregon.
- Kamio, Akio 1995. Territory of information in English and Japanese and psychological utterances. *Journal of Pragmatics* 24: 235-264.
- Takubo, Yukinori and Satoshi Kinsui 1997. Discourse management in terms of mental spaces. *Journal of Pragmatics* 28: 741-758.

【中文】

- 費孝通 1980. 〈關於我國民族識別問題〉《中國社會科學》1980.1: 94-107.
- 黃布凡 1990a. 〈道孚語語音和動詞形態變化〉《民族語文》1990.5: 23-30.
- 1990b. 〈扎壩語概況〉《中央民族學院學報》1990.4: 71-82.
- 1991. 〈扎壩語〉戴慶廈、黃布凡、傅愛蘭、仁增旺姆、劉菊黃《藏緬語十五種》pp. 64-97. 北京: 北京燕山出版社.
- 黃布凡(主編)1992.《藏緬語族語言詞匯》北京: 中央民族學院出版社.
- 劉勇、馮敏、奔嘉、劉輝強等 2005.《鮮水河畔的道孚藏族多元文化》成都: 四川民族出版社.
- 四川省道孚縣誌編纂委員會(編)1997.《道孚縣誌》成都: 四川人民出版社.
- 孫宏開 1983a. 〈六江流域的民族語言及其系屬分類—兼述嘉陵江上游、雅魯藏布江流域的民族語

- 言〉《民族學報》1983.3: 99-273.
—— 1983b. 〈川西民族走廊地区的語言〉李峰銘(編)《西南民族研究》pp. 429-454. 成都:
四川民族出版社.

【和文】

- 服部四郎 1950. 「附属語と附属形式」『言語研究』15: 1-26. (再録: 服部四郎 1960. 『言語学の方法』pp. 461-491. 東京: 岩波書店)
星泉 1997. 「チベット語ラサ方言における述語の意味の記述的研究」博士論文、東京大学.
久野暉 1978. 『談話の文法』東京: 大修館書店.
益岡隆志 1997. 「表現の主観性」田窪行則(編) pp. 1-11.
西田龍雄 1993. 「川西走廊言語」亀井孝・河野六郎・千野栄一(編)『言語学大辞典 第5巻
補遺・言語名索引』pp. 197-198. 東京: 三省堂.
白井聡子 2006a. 「ダバ語における視点表示システムの研究」博士論文、京都大学.
—— 2006b. 「ダバ語メト方言」中山俊秀・江畑冬生(編)『文法を描く—フィールドワーク
に基づく諸言語の文法スケッチ—』pp. 119-148. 府中: 東京外国語大学アジア・アフリカ言
語文化研究所.
鈴木博之 2006. 「ダバ語紅頂 (Ngwirdei) 方言の音声分析と方言特徴」『京都大学言語学研究』
25: 105-129.
鈴木陸 1997. 「日本語における普通体世界と丁寧体世界」田窪行則(編) pp. 45-76.
田窪行則(編) 1997. 『視点と言語行動』東京: くろしお出版.
田窪行則・金水敏 1996. 「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3.3: 59-74.